七七～七八年
三里塚決戦の記憶と意味

工人社

目次

三里塚三・二六管制塔占拠三〇周年座談会を振り返る……2
「正義」と「決戦」の時代は再び訪れるか　宮部彰

座談会　七七～七八年三里塚決戦の記憶と意味……7
白川真澄・中川憲一・宮部彰・大森万蔵・吉田和雄・瀬尾和郎

資料　三里塚決戦の軌跡（77年1月～79年12月闘争小史）……45

資料　白川真澄「日本人民にとっての三里塚決戦の歴史的意味」（七七年九～十月）……53

資料　宮部彰「三里塚3・26管制塔占拠闘争の十周年を迎えて」（八八年三月）……61

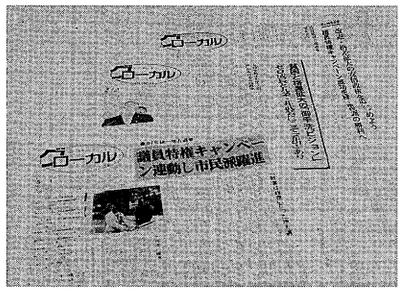
新聞グローカルの定期購読を！

グローカル
自治・連帯・エコロジー
GLOCAL

A3版6頁毎月1日発行

郵便振替　00160―7―48406
または、左記の支局に直接お申し込み下さい。
【東京】東京都千代田区富士見一―三―一上田ビル二一〇工人社　TEL03（3264）4195
郵便振替00160―7―48406
【神奈川】郵便振替00290―5―36468
【愛知】名古屋昭和郵便局私書箱五二号
【京都】京都市伏見区納所星柳一七―二セントラルハイツ淀六〇七　五十嵐気付　TEL075（632）1389
郵便振替01070―8―29132
【大阪】大阪府泉大津郵便局私書箱一四号関西工人社
郵便振替00970―4―25017
【福岡】福岡博多郵便局私書箱一八二号

《定期購読料金》
【手渡し】
一年＝三〇〇〇円
半年＝一五〇〇円
【郵送開封（三種）】
一年＝三六〇〇円
半年＝一八〇〇円
【郵送密封】
一年＝四〇〇〇円
半年＝二〇〇〇円



◎統一・グローカル合本　96年4月～98年12月（477～536号）　定価　6500円
◎グローカル合本　99年1月～01年12月（537～602号）　定価　7000円
◎グローカル合本　02年1月～04年12月（603～668号）　定価　7000円

★申し込み先
東京都千代田区富士見 1-3-1 上田ビル 210 工人社
tel03-3264-4195 fax03-3239-4409
http://www2s.biglobe.ne.jp/~mmr/glocal/　e-mail im43wj@bma.biglobe.ne.jp
［郵便振替　00160―7―48406　工人社］

三里塚三・二六管制塔占拠三〇周年座談会を振り返る

「正義」と「決戦」の時代は再び訪れるか

宮部彰

はじめに

三・二六管制塔占拠（一九七八年）から三十周年を記念して、グローカルで座談会をやろうという話になった時、「戦友会」になってしまうのではないか、という危惧があった。「あの時は楽しかった」という自己満足的な座談会になってしまい、三里塚闘争に参加していなかった人たち、新しい世代の人たち、要するに体験していない人たちにとって、理解できない内輪的な世界をかもしだしてしまうのではないか、という危惧である。

その危惧は、当たったと思う。読み返して思うのは、かなりの部分が実力闘争の具体的な事実や逸話、そしてそれに至る経過などで占められているからである。また、その語りが「あの時は大変だったけど楽しかったね」という思い出話的な雰囲気になっているからでもある。

確かに記憶が風化するから、実力闘争を担った者たちによって、座談会という形で記録にとどめることは大切である。また単なる「戦友会」ではなく、その当時の時代的問題意識や、その時の政治的意義や、三里塚闘争全体の中で三・二六管制塔占拠闘争を位置づけようとする問題意識が、この座談会には確かにある。

しかしそれでもなお、何かが足りない、と思われる。それはなんだろうか。多分それは、時代を超えた理解の枠組みが、うまく提起されていないからではないだろうか。時代をへても語り継ごうとするのは、それを肯定的に評価するにしても、否定的に評価するにしても、時代を超えて語り継ぐべきものが、そこにあると感じているからに他ならないはずだ。

三里塚闘争、とりわけ三・二六を頂点とする開港阻止の戦いを、現在の視点から語るとすれば、その核心は「実

力闘争の楽しさ」「実力闘争の解放感」とは何であったのか、を体験していない人たちにも理解できる形で示すことではないかと思う。

その意味では逆に、この座談会は「実力闘争の楽しさ」「実力闘争の解放感」を十分に語りつくせていない、とさえ思われる。そして何故、あの時代は実力闘争が楽しく、解放感を共有することができたのか、そして現代では何故、実力闘争が古いものとして理解されてしまうのか、その理解の枠組み提示することが求められているのではないか。

その理解の枠組みを提示するキーワードは、「正義」と「決戦」であると私は思う。

正義を信じることができた時代

「実力闘争の楽しさ」とは、もちろん、機動隊と物理的にぶつかるのが好きだということではない。実力闘争に「意味」を見出すことができるがゆえに、楽しいのである。また逆に、逮捕や死傷をも覚悟するためにも「意味」を見出すことが求められるのである。そして「意味」を見出せるためには、「ある価値観が正当である」という確信的感覚が必要不可欠である。つまり「正義」の感覚である。

管制塔占拠闘争の記録フィルムのタイトルは、そのものズバリ「大義の春」である。

私たちのグループには、「国家の暴力と対決することの正当性と正義感」「資本主義的工業化に抗して農業を基礎とする社会構想への確信」「ベトナムに通じる『帝国主義』に抗する正義感」があった。反国家・反資本・反「帝国主義」のラディカルな正義感覚である。それを他の党派は「左翼農本主義」「アナキズム」などと批判していた。しかし他の党派も、その中身は違うが、当然にもその党派に固有の「正義感覚」を持っていた。

その時代は「正義が乱立する時代」だったのである。「正義の多様化の時代」とも言いうるだろう。

その後、「正義の相対化の時代」、または「理想の衰退の時代」が始まる。八〇年代の日本は、ポストモダン思想が勢いを増した時代であり、「大きな物語の終焉」、つまり「正義の終焉」が語られた。各種の世論調査でも、人々の意識が保守化を示した時代であった。そして八九年の東欧革命と社会主義の崩壊に至る過程は、「社会主義という理想」の終焉を決定づけ、その後、新自由主義とグローバリズムが世界を覆う時代になった。さらに反グローバリズムのテロは、「帝国主義と対決することが正義」という感覚と距離を取るように人々に作用している。

そして現代の日本。「リスク計算」「コミュニケーション能力」「自己責任」などがキーワードの時代である。「制度変革」よりも「リスク管理」が優先される時代。共有化される正義＝「大きな

物語」が不在で、価値観が多様化し「小さな物語」が増殖しているために、コミュニケーション能力が求められる時代。社会的正義感覚が衰退しているために「自己責任」「濃密な関係への渇望」「自分探し」へと関心が向かってしまう時代。それが現代なのである。

実力闘争を支える情熱の必要条件である共有化されうる社会的な正義と理想が衰退してしまったという他はない。非妥協の実力闘争は正義感覚なくして実現しえない。その意味で、三・二六管制塔占拠闘争は、「正義感覚」が存在しえた最後の歴史的に大きな意味を持った戦いだったのではないだろうか。

勝つか負けるか「決戦」が持つ緊張感

管制塔占拠闘争とその前後の実力闘争が楽しい、と感じられたのは、単に「正義感覚」を持つことができたからだけではない。「正義が勝つか負けるか」という「決戦的意識」に支えられていたからでもある。決戦的緊張感が生み出す「濃密で凝縮された楽しさ」とも言えるだろう。

「集会に何人集まったから、よかったね、残念だったね」という感覚とは異なり、開港阻止の戦いは「勝つか負けるか」がはっきりせざるをえない闘いであり、負けることが今後の日本の運動や闘争にとって重大な岐路になっているという感覚の共有があったことは間違いない。「決戦的緊張感覚」の共有である。それは、「このままではすまない」という危機感とも言い換えることができる。

その時代の運動や闘争の行く末が、ひとつの戦いの成否へと凝縮される闘争、それが三里塚開港阻止の闘いであった。このような戦いは、その後、存在しえていない。

わずかに、アメリカのイラク攻撃に反対する全世界的な反戦運動が、比較しうる「決戦的緊張感覚」を持っていたということができるかもしれない。しかし、そこにはアメリカの不正義を批判することができても、それに代わる「正義」を対置することができなかった。全世界で一〇〇〇万人を越える人々がデモに参加するという大規模なものであり、ベトナム反戦運動に匹敵する広がりを持ちながらも、アメリカに対抗したのがテロであり、ベトナム解放闘争が持った「正義感覚」は欠落していた。

それゆえイラク戦争反対の切迫感は、その根っこの所で対抗する「正義感覚」が欠落しているために、「なんとしても阻止する」という「決戦的緊張感覚」とは異なっていた、と言わざるをえないであろう。当然、身体を張ってでも阻止するという実力闘争は起きなかった。

逆に、実力闘争や機動隊との対決を自己満足的に唱える古い運動スタイルへの違和感から、「楽しい」「多様」なスタイルが運動スタイルとして追求された。それはそれで根拠があり意義

がある試みだったと私は評価している。しかしそれでもなお、「決戦的緊張感覚」が、私自身の感覚としても、運動全体の感覚としても、なかったという事実は否定しようがないだろう。

「勝つか負けるか」という運動や闘争は、現代においては少ない。わずかに選挙が、勝ち負けを明確に決するものである。だから開票の時には、緊張感がみなぎるのである。しかしそこには、やはり「正義感覚」はない。負けた場合に「自分たちの主張が理解されなかった」という消耗感、勝った場合に「自分たちの主張が理解された」という喜びの感覚は生まれても、「正義が実現された」「正義が実現されなかった」という感覚とは質的に異なっている。

そして何よりも、選挙は再び挑戦すればよいのであり、決定的敗北、決戦的敗北ではないのである。「決戦的緊張感」を共有した戦いの勝利は、解放感を生み出す。管制塔占拠闘争が勝利した時、多くの人々が、党派、運動テーマ、地域を越えて解放感を感じ、希望を感じたのである。

現代における「正義」と「決戦」の行方

「正義感覚」に支えられ、「決戦的緊張感」をともなう主体は、闘争共同体である。それは、「正義」という公共性感覚に開かれると同時に、闘争共同体という濃密な親密的関係をも同時に作り出していたのである。それは相互に支えあう関係だった。

時代は変わった。

「正義」という公共性感覚は、相対化され、バランスを図る意味での「正義」、すなわち「公正」という公共性感覚が主流となっている。合意やコミュニケーションや熟議の大切さが説かれ、非和解的で裁断するという意味での「正義」感覚は、衰退している。

他方で、濃密で親密な関係は、「闘争共同体」「連帯」「仲間」ではなく、私的な領域で過剰なほどに渇望されている。若い世代の中で、親密的な関係への渇望が以前よりも過剰になっていることは、社会学的に実証されている。ケータイは、疎遠な関係ではなく、濃密な関係を求めるためのツールなのだ。

つまり、「正義」「公共性」の領域から親密感覚が失われ、私的な親密関係は過剰化している。そこで立ち表れているのは、次のようなことではないか。

「正義」「公共性」の領域では、親密感覚が不足し、人々の社会的な連帯を構築すべき政府に対する不信が強まっている。それゆえ、逆に、社会的・政治的領域ではナショナリズム的な共同性、ポピュリズム的な親密性を求める感情が、ミニバブルのようにたえず繰り返される、と。

他方で、私的な親密関係の領域では、その親密圏への過剰な期待ゆえに、本来は社会的な公共性や正義の問題で処理され解決されるべき事柄が、親密的な関係の問題として意識されてしまっ

ているのではないか。「自己責任」「自分さがし」「運命・宿命」として処理されてしまう、ということだ。

秋葉原無差別殺人事件の犯人は、絶望的な孤独感と不遇感に追い込まれていたとされている。格差・派遣労働問題の社会的・政治的観点からは、「自己責任」意識へと追い込むことが問題として指摘される。親との関係、彼女ができない、友達がいない、ネットでも孤立という親密圏的観点からは、その親密性への過剰な渇望が指摘できるのではないか。

つまり、「正義」「公共性」の領域と、「親密性」「私性」の領域が、うまく処理されずに、混沌とし錯綜した関係として犯人の中に渦巻いているように思われるのだ。彼にとっては、社会性はついに意識化されず、親密で濃密な関係への渇望、すなわち「決戦的緊張感」という充実感（リア充）は、秋葉原での無差別殺人事件として実現されたのではないだろうか。

最後に

前書きのつもりが、公共性の空間と私的な親密圏が錯綜する主体の問題になってしまった。まとめよう。

管制塔占拠闘争へと攻め上る戦いを担ったのは、「正義」と「決戦感覚」を持つことができる主体だった。そこには自他を貫く共通感覚を形成する「大きな物語」があった。しかし「小さな物語」が無数に浮遊する時代は、自他を貫く共通感覚を前提とする主体という意識自体が希薄化し、「正義」「決戦感覚」は形成されづらい。

しかし、再び時代は転換しつつあるように思われる。

金融危機は再び、資本の野放しで自由な活動の規制を求めている。規制は社会的な公正や正義の感覚の再興を必要とする。そしてそのような気運は強まっている。また、時代を画するのではないかという危機意識が生まれつつある。抜本的な転換が必要であり、岐路に立っているという「決戦感覚」である。

このような時代的転換点に、主体はどのように立ち上がってくるのだろうか。正義感覚は強まっても、グローバルな政治空間の前に途方にくれるだけなのだろうか。危機意識は強まっても、それを個人的で私的な「運命」や「宿命」として受け入れてしまうだけなのであろうか。

私たちは再び、三里塚決戦、管制塔占拠闘争の時代のように、そしてもう少し広げて六〇年代後半からの新左翼の時代のように、「正義」と「決戦的緊張感覚」を、新しい時代にふさわしい形で主体化して前に進むことができるのであろうか。

私は座談会を振り返り、上述したような問題意識が立ち上がるのを感じた。これを初めて読まれるみなさんは、また、これを読み返されるみなさんは、何を読み取り、どのような問題意識を持たれるのだろうか。

座談会

七七～七八年三里塚決戦の記憶と意味

三・二六後の反省

吉田　管制塔闘争三十年ということで『1978・3・26　NARITA』（結書房）が発刊（〇八年四月）されました。同書では第四インターが主導して管制塔占拠闘争を準備していった過程が中心で、七七～七八年の三里塚決戦全体についてあまり触れていない。そこで、当時共労党プロ青同（共産主義労働者党全国協議会）、プロレタリア青年同盟全国協議会）で闘った私たちの座談会を行うことにしました。

白川　我々も記憶が薄れてきているし、マイナス点も含めて総括するためにも、三十年前は明らかにできなかった事実を記録しておく必要がある。

吉田　同書で和多田糸夫さんが、三・二六後の反省点として、その後の一撃がなぜできなかったのか。具体的には山田レーダーサイトへの一撃を何故できなかったのか。プロ青同から提案があったが、やろうとしたら警備がきつくてできなかったと。二つ目に政治交渉を用意すべきだったと。その後の展望が何もなかったと総括している。

出席者

白川真澄　当時、共産主義労働者党全国協議会の三里塚闘争責任者

中川憲一　七八年管制塔占拠闘争元被告

宮部彰　七七年一二・二一空港突入闘争元被告

大森万蔵　当時、プロレタリア青年同盟現闘団

吉田和雄　七八年二月横堀要塞戦元被告

妹尾和郎　七八年三月横堀要塞戦元被告

宮部　本だけ読むと、七七～七八年三里塚決戦で「空港包囲・突入・占拠」に上りつめていった過程がはっきりしない。インターが最初から、そのつもりだったように書いてあるが、違うのではないか。三里塚闘争全体で節目があり、三・二六へ向けて上りつめていった。

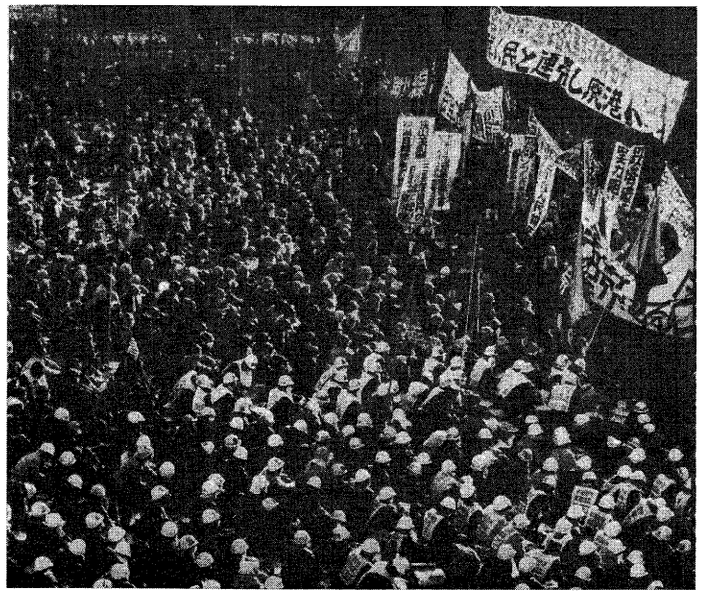
吉田　『1978・3・26　NARITA』に対しての今回欠席したOさんの意見だが、管制塔闘争の総括と三里塚決戦の総括は別物。本に関して特に言うことはないとのことでした。Iさんは、本は読んだが三十周年を祝う気になれない。自分は生死についての覚悟はなしに参加した。それなのに人が死んだ。非常に重い気分だという感想でした。

初めての実力闘争

白川　七七年一月、福田赳夫政権が年内開港宣言を行い、一月一九日に緊急の現地行動を行った。その後、二月六日の集会の後の夜に空港の第五ゲートに対して初歩的なゲリラをやったのが三里塚決戦での我々の実力闘争の始まりだ。中川がレポをやっていたのを覚えている。

初めてだったからすごく緊張した。団結小屋に待機して警察無線を聞いていると警察も初めてのゲリラだったから驚愕していた。緊急警備網を敷いて機動隊を出してきた。どちらに向かうかと緊張したが、幸いなことに南の岩山方向への検索に向かった。それで我々の部隊は横堀の団結小屋に引き上げることができた。当時の団結小屋は、まだプレハブ小屋を建てなくて物置を転用した本当に小さな小屋。狭くて横になることもできない。互いに重なり合って寝ていたら、何時間後に機動隊が来て小屋を包囲される。だが、踏み込んでくることはできなかった。

初めてのことで向こうも相当混乱し



2万人の現地集会＝1977年4月17日

ていた。こういうことが起きると緊張したと思う。

我々は弾圧対策と功名争いをしないというのもあって、他派のように発表しなかった。「天狗がやった」と言っていた。

宮部　二月六日に現地集会が開かれた。私は、その前に現闘（三里塚現地闘争団）として派遣された。

大森　鉄塔決戦が叫ばれていたので、決戦現闘ということで現闘を十人強まで増やした。私はその直前の七六年に現闘には派遣された。新しい人が増えてくるし。

宮部　二・六集会の少し前に、五ゲートに火炎瓶を投げに行ったのは覚えている。重い木刀を持ってものすごく走って、やっと帰ってきた。

中川　俺が覚えているのは、二・六集会が終わったので帰るつもりでいたら、トラックに乗せられて、ガソリン入りのタンクを渡された。「五ゲート行くから、なるべく近づいて、これをまいてこい」と。重いのを持っていってやったよ（一同笑い）。皆で行って、近くで下ろされて、何人かガードマンがいるところまで行ってガソリンを撒いて火を着けた。

大森　六九～七一年を経験してない世代をふくめて経験を蓄積していった。

宮部　ほとんどが二十代前半だったし。

大森　「練習」の初歩コースが笹川財団関係の航空保安施設だった。数回やっている。最初は、鉄パイプを振り上げたら、後ろのメンバーに当たってケガしたりとかあった（笑い）。次が横芝アウターマーカー。その上が筑波のレーダーサイトだった。（註・アウターマーカー＝滑走路末端までの距離を航空機に知らせる装置）

白川　インターや中核派は部隊が多いから、多少逮捕者が出ても大丈夫だが。我々は人数が少ないので、一つ一つの闘争をヒットエンドランで緻密にやって、絶対犠牲を出さずに撤収することに神経を使った。

私は七一年の九・一六（東峰十字路戦闘）の頃は政治指導だけで作戦計画には関与してなかった。七七年に入っていく過程で、H、I、Oに私が入った四人で作戦指導部をつくり、戦闘計画を立てて実行していた。層が薄いから、かなりやばい体制だった。

宮部　当時は、反対同盟が岩山に建てた大鉄塔があり、「鉄塔決戦」が叫ばれた。福田の年内開港宣言で毎月集会があり、四月十七日には二万人の大集会があった。我々も毎月実力闘争をやっていた。四・一七の時はインターに先駆けされてしまった。

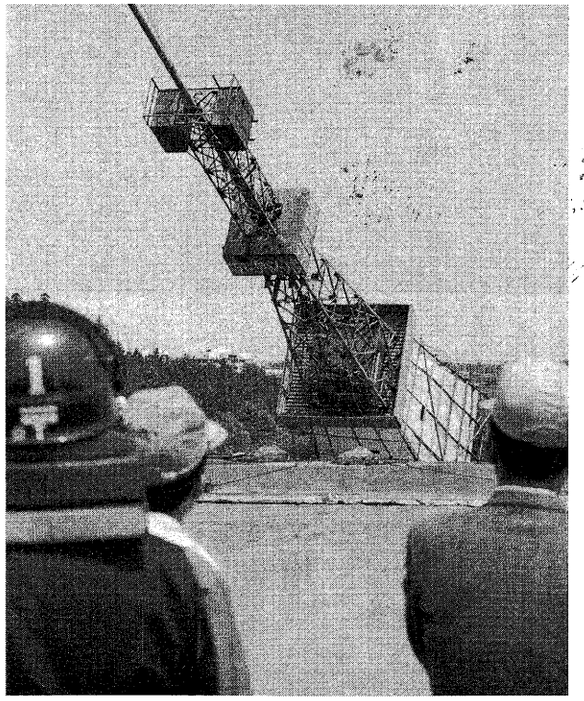
妹尾　インターはゲリラ戦より部隊でやる集団戦が得意だった。

大森　我々は皮肉交じりで「遠足」と呼んでいたが、四・一七の前からインターは百人単位で鉄塔周辺を走り回って地理の熟知と集団行動の訓練をやっていた。当時、各派の現闘が数人か十数人参加した小集会を鉄塔前で毎日やっていたが、インターはいつも一人しか参加しなかった。インターの動員は一年で一気に増えた。

転換点だった五・八

宮部　五月六日に岩山大鉄塔が闇討ち撤去された。急いで岩山に駆けつけると、機動隊がガス銃を水平撃ちして催涙弾がビュンビュン飛んできた。

五・八ではインターが大衆的な部隊で五ゲートに突っ込んで火炎瓶を投げていた。



闇討ち撤去された岩山大鉄塔＝1977年5月6日

大森　五月六日のとき、中核派は動員をかけて五十石から鉄塔を封鎖した機動隊へ向けて、攻撃をかけた。

白川　五月八日、同盟主催の緊急集会前、五ゲートに我々も全員が向かった。インターが単独でもやるというので、我々も行かなければと。辺田の公民館に集合して、そこから第五ゲートまで長い距離を走った。武器を用意してなかった解放派が前に進まないので、それをどかして前に出て突っ込んだ。私たちにとって初めての公然とした実力闘争だった。

当時まだあった千代田公民館の前に廃港要求宣言の会の前田俊彦、鎌田慧などがいて戦闘を見ていた。私も一緒にそこにいた。そこにも催涙弾をどんどん撃ってきた。

宮部　火炎瓶取締法とか深く知っているわけではなく、割と平気で投げていた。前の十人くらいが火炎瓶と鉄パイプを持っていた。

中川　私は石を投げた。

白川　前が戦闘部隊で、後ろが投石部隊。戦国時代の石つぶて隊みたいだった。五・八で初めて火炎瓶投げたのも多かったと思う。

吉田　五・八では投石部隊だった。七六年の産土の鉄塔破壊道路阻止の行動から行っていたが、三里塚は薄暗いところという印象だった。五・八が初めて参加した実力闘争で解放感があった。中核派も実力闘争をやっていたが、まるでパクられるために突っ込んでいるようで、見ていて解放感を感じなかった。

宮部　天気も良かったし（笑い）。堂々とやった解放感ある戦いだった。新型催涙弾が五・六から使われた。新型弾が主軸だが、模擬弾＝ゴム弾も怖かった。シュッと脇をかすめて飛んで行った。

中川　模擬弾は覚えていないが、飛んできた催涙弾を拾って投げ返していた。

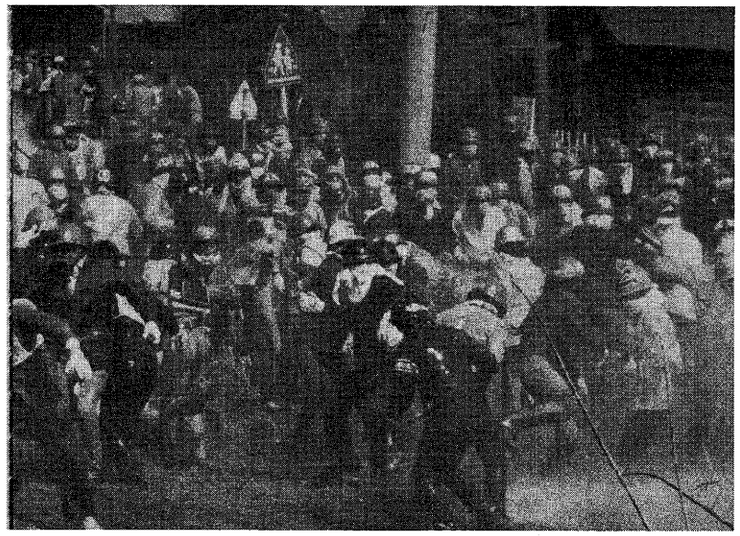
白川　小休止していたら、相模原の山口幸夫さん、梅林宏道さんたちが現れてどういう状況になっているのかと聞いてきた。

宮部　横堀の労農合宿所に戻ると、ガス銃水平撃ちで東山薫が殺されたという連絡が入った。

加瀬勉さんが合宿所の外階段に立って「守りの闘いから攻めの闘いへ。ベトナム人民が勝利したディエンビエンフーのような闘いを」というアジテーションをした。五・八は大きい。三・二六へ向かう過程での一つの飛躍があった。どうやったら開港を阻止できるかを本気で考える。

大森　大きな闘争は五・八が初めて。部隊対部隊の集団戦として始めての闘いだった。

宮部　五・六で当時のプロレタリア青年同盟全国協議会から「三里塚を闘う青年先鋒隊」への結集の呼びかけが出される。その後の「開港阻止決戦」はプロ青同・先鋒隊の部隊で闘った。



転換点となった「五・八」＝一九七七年五月八日

白川　当時実力闘争に熱心だったのは木の根団結小屋の三支労だった。彼らは実力闘争を強調して、連帯する会から離脱していった。

五・八の後、五・二九で三支労は実力闘争をして多数の逮捕者を出し、主力部隊が捕まって続いての闘争が難しくなった。

宮部　同時に中核派もやって、戻ってくるなという感じで突っ込ませていた。二、三十人まとめて逮捕されていた。

ガス銃で殺された東山薫さん

ゲリラ作戦の成功と失敗

大森　五・八の後、我々も含め連帯する会系全体が空港に突入するぞという機運になってくる。「空港包囲・突入・占拠」へ向けて六、七、八月と実力闘争を積み重ねていく。

宮部　七、八月にはアドバルーンを上げるなどジャンボ機試験飛行阻止行動が岩山で取り組まれた。

白川　開港阻止へ向けて、空港を安心して眠らさないと取り組んだ。逮捕者も出たし、火炎瓶でやけどした人もいた。

中川　管制塔の津田が行方不明になってあとから戻ってきたりした。

宮部　七月下旬に七ゲートを全員で攻撃した。木を切り出して七ゲートへ向かった。

妹尾　辺田の神社に事前に集合した。

大森　女性陣から、五・八に女性が参加してないと批判が出て全体でやろうと計画した。撤退するときに警察に追われて山の中に追いこまれた。

白川　相手の新兵器がヘリコプターだった。あれがゲリラ封じに有効で脅威だった。

宮部　辺田の山の中に追い込まれて、白川さんもいた。

妹尾　山の周りを機動隊に包囲され、部隊が全滅するところだった。辺田の反対同盟が出てきて機動隊を追い払ってくれた。あれは本当にやばかった。

宮部　その作戦と五・八が我々にとって大きいポイントだった。

和多田さんが反省点として書いている山田レーダーサイトへの攻撃だが、実は開港前の七七年秋に行っていて、最初は成功した。

大森　単独で計画して二回行った。建物に入ってロビーがあり、ガードマンが二人いた。更に二つくらいドアがあって、奥に機械室がある。

最初、入口のガラスを割っている間にガードマンが中に逃げ、閉じこもってしまった。興奮して気づかなかったが、実は鍵がかかっていなかった（笑い）。しょぼい闘争といえばそうだが、いけるなと感じた。次は横芝への攻撃をかけた。

それほど派手な成果はないが、作戦を重ねていくうちに三・二六へ向けて手応えを感じた。

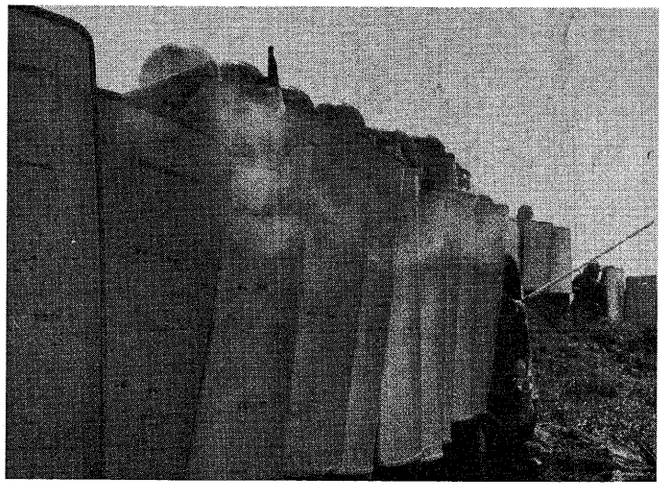
「包囲・突入・占拠」の提案

白川　七七年九～十月は三里塚全国行進を行った。反対同盟も一緒に歩いて、全国で大衆的基盤を作った。

宮部　「統一」が「すべての力を三里塚の勝利へ」と呼びかけ、白川真澄「日本人民にとっての三里塚決戦の歴史的意味」（「統一」七七年九月二五日、十月二十日＝五三頁）が出て、本気でやるんだな、やらないといけないなと。要するに三里塚に全て突っ込めということ。

吉田　その論文は良く覚えている。僕は学生なのですっと入れたが、職場や部落解放運動の現場をもっていた人は大変だったと思う。

白川　「空港包囲・突入・占拠」の方針をなぜ出したのかというと、それまでの三里塚は戦術的には守りの闘い。砦（とりで）を作って、公団や機動隊に攻めてこさせて徹底的に抵抗する。



デモ隊を弾圧する機動隊

今から見れば本来の姿といえるが。

じわじわ攻められてきて、防衛線が後退する。これでは勝ち目がない。攻撃的な闘争形態が三里塚であってもいいのではないかと、私たちの間でもかなり議論した。六〇年安保のときの全学連部隊による一一・二七国会突入（五九年）は社会に大きな衝撃を与え

た。それから考えたら、こちらから空港に突入する闘いがあっていいのではないかと考えた。後で「空港包囲・突入・占拠」となるが、「包囲・突入」を大衆的に提起したのは我々が最初だと思う。当時は「革命の攻勢戦略」とか言っていて「攻勢」が好きだった（笑い）。

防衛から攻撃的な闘いをやらなければならないというのが、インターを含めて三里塚闘争に連帯する会内部で受け入れられ、無党派の人も多かった連帯する会全体の方針となった。

宮部　鉄塔が倒されて、守りの闘いから攻めの闘いへと雰囲気が変わっていた。

インターも開港阻止決戦と言ったが、まだ具体的な方針を出していなかったので。当日一発やるだけの闘争ではダメだと批判した記憶がある。

中川　鉄塔が倒されて、戸村一作委員長をはじめ反対同盟自身が守りから攻めの闘いへと変わった。インターも含めて全体が攻めの闘いへと変わっていった。

白川　出したときは支持されるか確信はなかったが。意外に共感を得て、それで行こうという全体の機運が盛り上がっていった。

五・八では中核派も一緒にいたが、鉄塔が倒された後に出された「包囲・突入・占拠」の方針に中核派は乗らなかった。後で悔いたと思うが。

宮部　中核派は鉄塔防衛の次は二期用地防衛という守りの闘いで変わらなかった。守る鉄塔がなくなっても、空港を攻める方針が出てこない。二期決戦論から転換できなかった。

白川　突入・占拠はスローガンとしか思ってなかったのだろう。

宮部　言っているだけと思っていたのでは。実際に占拠できるとは思わなかっただろう。

妹尾　それから考えると、連帯する会の位置はずいぶん大きかった。

なぜ三里塚だったのか？

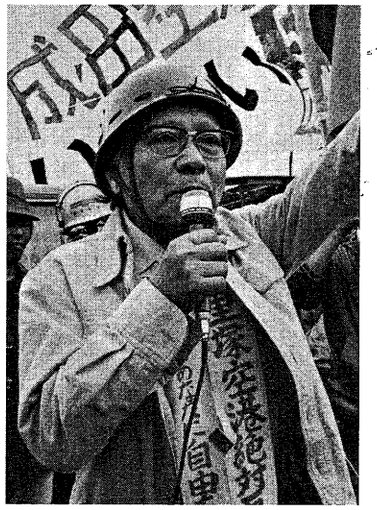
宮部　五・六で鉄塔が倒されて、開港準備が進んでいく。その過程で、我々とインターがどうにかしたいと本気になる。三里塚をどう考え、なぜ本気になったのか。我々は、近代主義批判、農業、ベトナム革命など三里塚に力を入れる思想理論的背景・戦略的価値判断があって、思い入れがあった。「統一」を読んでいると気合が入った。

大森　共労党プロ青同の考えていた三里塚への思いは、半分過剰な思い入れを含めて、近代社会と違う社会を創りに三里塚へいった。街頭闘争がなくなって、七〇年代半ばに入ると運動の力を

全国的にぶつけるところはなくなっていた。

宮部　すんなり三里塚決戦に入っていた我々と違い、政府打倒しか言わないインターがどうして三里塚をやるのか。彼らの機関紙を読んでも解らなかった。インターは労働同盟論で、政府打倒しか言わなかった。

白川　内部で色々あったようだが、インターの政治責任者の今野求さん（故人）はやると腹をくくっていた。共青同の青年たちはやりたくて仕方なかった。



戸村一作・反対同盟委員長

妹尾　インターの中でも、宮城などは農業というところで三里塚を重視していた。

吉田　我々は近代主義批判・農業ということから三里塚闘争に入ったが。彼らは砂川闘争、高浜入闘争など住民闘争を昔から支援していた。

大森　当時インターの現闘と議論したが、彼らは労農同盟論で労働者のたたかいが農民を引っ張っていくという理論。どうしてお前たちが三里塚をやるのか解らないと聞いたら、「俺も解らない」と言っていた。

それでも、運動としてはどんどん進んでいく。盛り上がっているから、人もカネも集る。

宮部　当時、我々もインターもベトナム革命への評価は高かった。評価の観点は違うが。先鋒隊は赤ヘルメットに星マークだったし、ベトナムの旗（「金星紅旗」）と同じ旗も掲げていた（笑い）。

白川　インターは自分たちの旗の他に南ベトナム解放民族戦線の旗も掲げていた。

中川　和多田さんが、管制塔部隊の人数を当初二十二人にしたのも、一九六八年のテト攻勢での南ベトナム解放民族戦線のアメリカ大使館占拠部隊にならったものだった。

宮部　組織の存亡をかけ、警官の発砲を受けて、ある程度死を覚悟して参加するという構えが問われていた。

白川　やはり実力闘争を公然とできるのは三里塚しかない。ベトナム反戦・反安保の政府中枢進撃の闘いは負けた。六九年十一月蒲田で自警団に追いかけられ、人民の海などない。都市で暴れ

ても勝てない。党派も、六八～六九年をくぐった人もそう思った。若い人のエネルギーも、三里塚ならやれると。

大森　いろんな運動が敗北。労働運動にしても、どこかで折合いをつける。三里塚は折合いがつけられない闘い方が十数年続いていた。そこの魅力。

白川　各地の住民運動、当時盛んだった自主管理闘争の労組もたくさん現地にきていた。

宮部　非妥協の闘いの魅力。ここで勝たんといかんという期待もあったし。運動はどこかで妥協したりして収束してしまうというイメージをどこかで払拭したい。権力のおごりを懲らしめたいという思いが充満していた。

大森　これこれという感じで共感があった。

逆に思い入れを含めて、実態以上に膨らんでいくというのもあった。

一二・二一空港突入

宮部　三月に向けて「空港包囲・突入・占拠」が三里塚闘争に連帯する会全体の方針になる中で、一九七七年十二月二一日「空港突入闘争」に参加した。慣熟飛行阻止闘争が闘われていた時期だ。空港突入は可能だという例示的な戦闘を人々に示すという位置づけだった。この時初めて、「突撃小隊」というのを編成した。

白川　それまでは逮捕者はできるだけ出さないという方針でやってきたが、撤収できない部隊を編成する必要があるというので、突撃小隊を作った。

宮部　一二・二一では私を含めた四人が第一次突撃小隊。この四人は逮捕覚悟で闘いに参加した。後方支援＝工作が四人で、管制塔の太田もいた。

実際の作戦では、トラックに分乗して行った。ところが、工作班がフェンスを破って、四人がいざ突入というところでトラックがエンコしてしまった。トラックのバッテリーが中古だったから（苦笑）。エンジンをかけなおそうとしているところで、機動隊に包囲された。

後方支援の四人は逃げたが、ヘリコプターで追いかけられた。途中で二人を降ろし、トラックで逃げた二人は捕まった。

そんな実態だったが、獄中で差し入れられた「統一」の記事を読むとうまいこと書いてあるので、ものは言いようだと感心した。

白川　当時、インターがすごい物資・人力・資金を投入して横堀要塞建設を先行的に始めていた。我々は一二・二一で先駆的に空港突入をやり、分業関係になっていた。

管制塔作戦の準備

白川　我々も空港のマンホールを使って空港に突入できないかと思いついて、七七年の秋口ごろに実は調査のために現闘のメンバーが中に入った。

その話をIと一緒に青行隊のYにしたところ、インターが排水溝の地図を使って調査をしているから、お前らは待てということだった。それで、我々はマンホールの調査はストップした。ところで、権力側は反対派がマンホールを使う可能性を予測していなかったのだろうか。

中川　わからないが、我々が入ったマンホールしか開いているところはなかった。

妹尾　マンホールはインターが、警察関連を襲撃するために以前から知っていた。

白川　インターがマンホールを使った作戦を何らかの形でやるだろうと予想はしていた。

中川　今野さんが単独ではなく連帯する会三派でやると決めた。やると決めたのは二月要塞戦のあとか？

白川　決めたのは二月の横堀要塞の闘争以降だと思う。

中川　俺は一月には「突撃小隊」に選抜されたと言われているんだけど。だから、その前に計画は決まっていたと思う。

白川　突撃小隊のメンバーをリクルートしていたが、誰をどういう戦闘に投入するのかまでは具体的に決めていなかった。二月要塞戦のメンバーを決めたのは直前だった。

三月までの時期に突撃小隊のメンバーを出してもらうために、雪が降る中、島根へ出かけて会議をやった。管制塔の話はしていないが、「戻って来れない任務がある。この地区からも一人出してくれ」と切り出した。地区の会議といっても、Y君（現在は上関の反原発闘争のリーダー）の下宿で、一つのコタツに入れるぐらいの人数だから。みんなの顔を見渡して、原勲が「俺が行くしかないな」とポツンと言った。忘れられない光景。

中川　原はそうなんだ。太田、津田も言われたのが、その頃だよね。

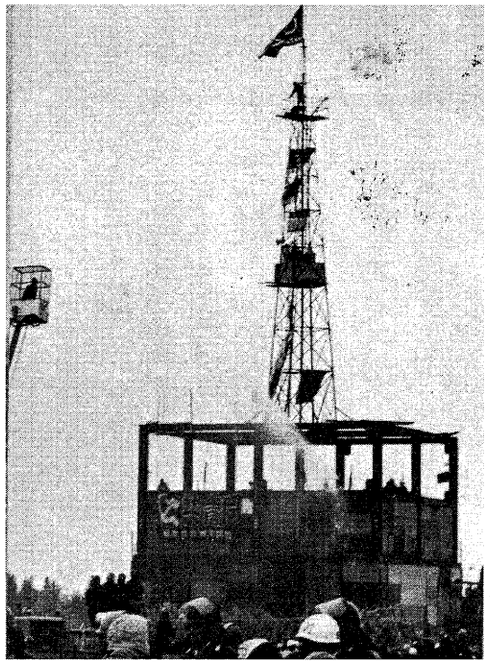
氷点下の四〇時間 二月要塞戦

宮部　当時の「三・三〇開港」までの闘争のイメージとか戦略とかはどうだったのか。

中川　要塞は最初現在の横堀鉄塔の場所に建設する予定だった。だが、権力が空港用地内で土地収用法の現状変更禁止がかかっているから、建設に着手

したら直ぐ妨害すると。それで七七年年末にやむをえず場所を移した。

白川　三ノ宮さんが要塞の土地を提供してくれたのが大きかった。反対同盟の土地だから権力も手を出せない。手を出すとしたら、航空法違反しかない。公団や警察も予想していたと思うが、航空法違反に引っ掛かる高さまで鉄塔を延ばしたら、闘争開始の合図とする。同盟とも相談して闘争開始の日にちを決めた。



2月横堀要塞戦＝1978年2月5～7日

吉田　建設段階では三派以外もいたが、二月のときに要塞に入ったのは我々とインター、戦旗日向派の連帯する会三派だけ。反対同盟は熱田一副行動隊長、長谷川たけ婦人行動隊長、小川源、小川むつ、石井英祐、内田寛一行動隊長の六人が入った。

最初は鉄塔から上に鉄棒を遠隔操作で出すはずだった。二回の試験ではうまくいった。ところが、本番では故障してうまく動かなかった。

僕は当時学生で、二月四日に大阪でアルバイト中に権力が要塞破壊に来るから現地に入れと電話が入った。要塞建設にはよく行っていたので、戦闘は予測していた。ただ、時期は予想していなかった。

五日現地に着いて、そのまま要塞に入った。五日未明から鉄塔建設をはじめ、徹夜で準備をして、六日の朝から戦闘になった。機動隊が来るのと、最後のメンバーが入るのがタッチの差だった。

下の要塞部分は放水と催涙弾を浴びながら、夜まで頑張り、下で四十一人が逮捕された。

白川　その後、どうして四人が鉄塔に籠城することになったの？

吉田　闘争に入る前に要塞でミーティングして何人かは鉄塔に登ると決めていた。日向派が辞退して、内心ラッキーと思ったが（笑い）。現闘からも、三人のうちの一人は鉄塔に登るようにいわれていた。

白川　知らせを受けて、続々と全国から駆けつけてきた。

吉田　鉄塔上からは、資材道路などで機動隊とぶつかっているのが良く見えた。かけつけたうちの部隊が、機動隊を相手に火炎瓶を投げて直ぐ逃げる「ヒットエンドラン」をしていた。

上から見ていると、全国から次々と人がかけつけてくる。要塞を包囲している機動隊を、さらに包囲していた。

大森　要塞へ迫ろうと、横堀街道からインターとの混合部隊で向かったのと、丹波山方向からは、いつも使っていたポンコツの青いトラックで向かった。

二月要塞戦のときは近くまで行けたので、中谷津などの反対同盟も要塞近くまで来て焚き火しながら、鉄塔の四人に声援を送っていた。

大森　要塞の前は耕作中の畑で、機動隊の乱入に地主の三ノ宮さんが抗議していた。

中川　英祐さんの連れ合いの石井節子さんが要塞の前で機動隊から盾で殴られて重傷を負っている。

吉田　見物に来た野次馬も結構多かった。

白川　氷点下の真冬に放水を浴びながら、生ま身の人間が圧倒的な数の機動隊を相手に鉄塔に登って不眠不休で闘っている姿はすごいインパクトがあった。六九年の東大安田講堂の籠城戦よりも長い四〇時間もたたかったんだから。

二晩を越して、いつ降ろすかということが問題になった。こっちはできるだけ頑張らせるという方針だったが、同盟のおっかあらが泣きながら「あんちゃんらが死んでしまうから早く降ろせ」と詰め寄ってきた。

吉田　四人のうちで僕の隣にいた一人が体力の消耗で声が出なくなった。

白川　反対同盟もお前らどうするのかと我々とインターに言ってくる。支援としては、降ろそうとなかなか言いだせないから、頑張らせると言うしかない。もちろん死なせるわけにはいかないが、あいつらのことだからもう少し頑張れるんじゃないかなと。

鉄塔での籠城戦

吉田　僕は五日夜から徹夜だったが、もう一晩なら自信はあった。

白川　正直、いつ降ろすか迷った。二日間たたかって全国にアピールする役割を果たしたわけだから、降ろしてもいいわけだし。

有名な話だが、同盟の北原鉱治事務局長も交えて、七日にもう一晩がんばらせるといったんは決めた。北原は家に帰って晩酌していた。その後、夜遅くに石井新二たち青年行動隊が降ろすと決めてマイクで四人に呼びかけた。四人は降りてきて逮捕された。北原はあわてて横堀に来たが、全部終わっていたのでえらく怒っていた。戸村委員長は私のところに来て、深々と頭を下げて「よくやってくれました」と言ってくれた。

吉田　戸村さんは『わが三里塚　風と炎の記録』（田畑書店）で二月要塞戦を書いている。

当時学生で若いし、心理状態は単純。インターは鉄塔上に三人いたが、こっちは一人なので、一人で三倍目立たなければならない。旗を目立たせるようにしなければいけないと、体力を温存するようにしていた（一同爆笑）。

火炎瓶を投げてしまった後、暖を取るために一本だけ投げずに置いていた。炎の芯がなくなって、俺の隣にいたインターのM君は軍手を脱いで、芯の代わりに燃やしていた。それで弱ってしまったのかな。

大森　インパクトある二月要塞戦があって、三月に向けてやるぞとなる。

計画立案から三・二六菱田集会へ

大森　「三・三〇開港」に対する闘いでは支援の間で綱引きがあった。

三月に入って、三月一日ジェット燃料阻止集会があった。佐倉機関区前でやった後、現地で集会を開いた。映画『大義の春』の最初に出てくる。「空港包囲・突入・占拠」の三里塚闘争に連帯する会とジェット燃料阻止だけの百万人実行委（中核派系）との綱引きが背景にあった。

白川　すごい寒風の中での集会だったことは覚えている。

管制塔作戦は作戦の方針は決まっていたが、主にインターが作戦を立案したから、まだ詳細を知らなかった。最終的にインターとの会議にHが我々を代表して出て作戦を聞かされた。隊長もその時点で決まっていた。

中川　『1978・3・26　NARITA』の本に出てくるが、和多田、H、日向派のNの会議で管制塔作戦の計画を決定する。和多田さんは空港包囲・突入・占拠に、破壊・奪還まで考えていた。機器を破壊した後、後の八ゲート部隊

が突入して管制塔部隊を奪還すると。

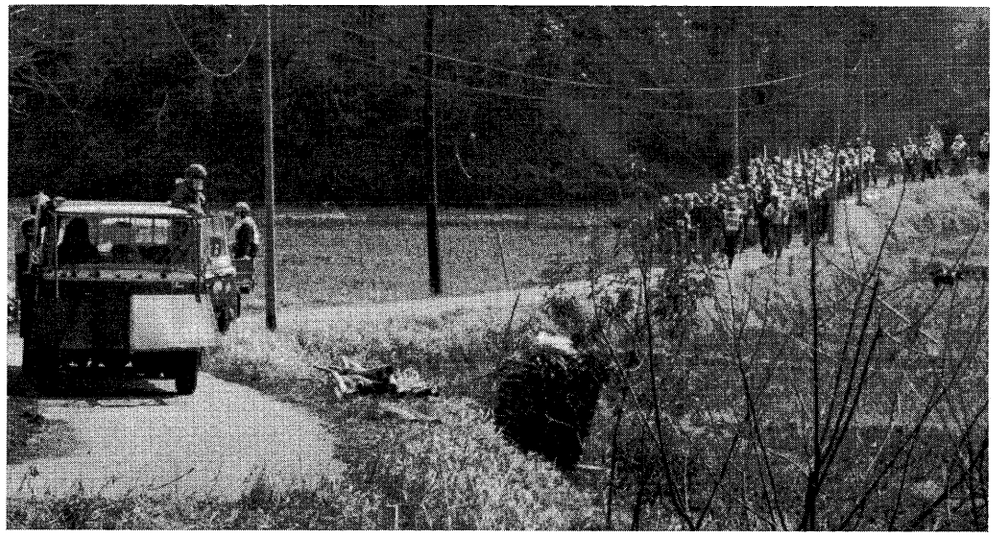
Hは「それはおかしい。占拠に成功したら、そこに篭城して還って来るべきではない」と主張した。それで和多田さんが作戦を変えた。だから、管制塔に突入したときに、十四階にバリケードを築いて、入ってこれないようにした。帰らないつもりだったから。

白川　和多田を中心に管制塔占拠作戦の計画が進められる一方で、空港突入作戦をどう組むかの準備が進められた。当時、連帯する会と共闘関係にあった労調委（開港阻止労働者現地行動調整委員会）が一緒にやることになった。労調委は、前衛派、首都社研（共産主義者同盟プロレタリア派）、フロント、主体と変革派、全国一般南部などで構成されていたが、フロントが実力闘争はしないと途中で抜けていた。

大森　銀ヘルの主革（主体と変革派）の動員が多かった。労調委はよく合流してくれたと思う。ほとんど赤ヘルの連帯する会より、幅が広がって見た目もいいし（笑い）。

白川　三方面から空港を攻めるという方針を立て、労調委には左翼に当たる第五ゲート方面からの進撃を担当してもらった。真ん中の横堀街道から進む部隊を主力部隊に見せかけるという方針で、連帯する会の大衆部隊が担当した。この部隊で逮捕者が多数出た。一番強い部隊が右翼から空港本体を攻めるという我々の方針が認められ、戦闘の経験を積んでいる三派の部隊五百人が丹波山方面から八ゲートへ進撃することになった。

三月二六日午前に菱田小学校跡地で連帯する会、廃港要求宣言の会、労調委の独自集会を開いた。空港突入のためには近くで集会をせざるをえないから。公称三千人で、熱気むんむんだった。午後から三里塚第一公園で反対同盟主催集会が開かれる。闘争が失敗したら



菱田を移動する第八ゲート突入部隊

分裂行動をやったことになるから、リスクがあった。成功したので、公然と攻撃されることはなかったが。

大森　解放派だけは後々も分裂集会をやったと批判していた。菱田での集会には戸村委員長はじめ反対同盟、部落解放同盟、各地の住民運動、労組など、多くの団体が出席して発言してくれた。突入の精鋭部隊だけの集会だけではなかった。少なくとも千五百人はいた。

そこから空港へ向けて出発した。

管制塔占拠に使われたマンホールの入口＝16人目が発見され、入れたのは15人だった

マンホールから空港内へ

中川　管制塔部隊の四人は前々日三月二四日に現地に入る予定だった。原だけ遅れて前日になり、四人で意志統一をする時間がなかった。三人だけ小屋で説明を受けた。

二五日午後八時に熱田家の庭に装備をそろえて集合した。記憶がはっきりしないが、全体の隊長だった前田道彦が地図を出して、我々四人と日向派三人にマンホールから入る作戦を説明したと思う。マンホールまで田んぼを突っ切るからと。説明中に、熱田テルさんが出てきてそんな暗いところでなく中に入れと盛んに言っていた（笑い）。

大森　直前に小屋で四人が決意表明している。いつの間に決まったの。どうして俺じゃないのと思った。

中川　団結小屋で全員の前に四人が立って、太田が代表して決意表明した。その時点で具体的な計画を知らされていたかは覚えていない。

白川　空港突入部隊だということは伝えてあった。担いでいく用具で分かっていたOが大変なことが起きたと叫んだ。マズイことが起きたのかと思ったら、「やっちゃったよ」と。成功しても管制塔ビルに突入するところまで、赤旗が管制塔に翻るとは思っていなかった。

白川　当日、Hはインターとの共同作戦本部に入り、私とOが中谷津の青年館に待機して、Iが八ゲートの部隊に付いていて、そこから無線連絡を受けていた。

作戦が始まってしばらくして、無線を聞け

たはず。ただ、その時点で空港に入って何するかまで伝えたかどうかは覚えていない。

中川　分厚い豚肉の料理とか上等な弁当ももたされた（笑い）。だから、一晩はかかるというのは分かった。多分篭城するだろうというのはあったが、はっきり覚えていない。

白川　前田の頭の中には、突入して設備を壊すか篭城するのか、イメージしていたのか。

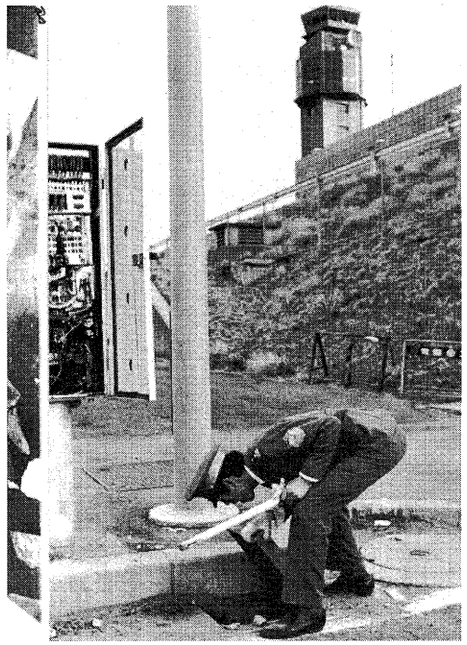
中川　前田から、見せられた地図には、エレベーターが二基あるとか何階に何があるというのはなかった。前田も、ともかく行けるところまで行って占拠し、管制塔の物を壊せという指示を受けていた。

白川　我々も同じで、行けるところまで行って、空港の施設を壊せという計画だったと思う。

吉田　本を読むと、前田は信頼できる仲間がマンホールに入ることができなかったというショックを引きずっていた。作戦でうまくいかないのではないかと。中川さんがうるさかったというのと（笑い）。

白川　Hが警察無線を聞いていて、マンホール入口で何人かが発見されたことが分かった。作戦は失敗したと思ったが、その後、妙に静かになって、マンホールに入った部隊を逮捕したという通信も交わされない。だから、大丈夫だろうと最終的に判断した。

妹尾　本の中で前田はマンホールを閉めに行って、機動隊と目が合ったといっているが。

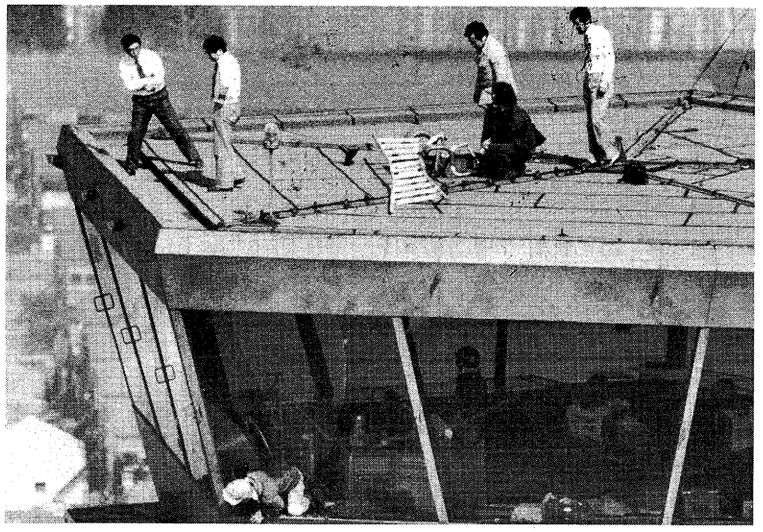


十五人が飛び出した空港内のマンホール

中川　○七年から言い出した。

妹尾　機動隊から本当に見えていたのかな。

白川　見えていなかったのかもしれない。ただ、マンホール前で一人逮捕しているわけだから、中に入っていると考えるのが普通。あの状況でマンホール内に入るのは、警察にとっても危険な



管制室を破壊する六人と屋上に出た管制官

ことだが。

大森　機動隊員も中にいるかもしれないと上司に言って、中に入って探せといわれるのが厭だったのかもしれないが。

中川　俺は入ることができた十五人の最後の方だった。入って降りていくときに、機動隊のドタドタという足音が聞こえた。それで下まで降りて、その後、前田が閉めに行ったわけだから。その後の出来事だ。

下でも機動隊の声と音が聞こえてきた。それくらい近かった。いつマンホールに入ってくるかと思った。

その後、移動して下水道の滝みたいになっているところで一晩明かす。我々プロ青同の四人は入り口に一番近いところ。機動隊が来たら直ぐに知らせるということで、三、四時間交代でレポをしたが、とても眠れなかった

妹尾　管制塔までの距離は？

中川　直線距離でも五、六百メートルでかなり歩いた。出口に一番近い地点で待機した。

開始数時間前に前田が全員を集めて、「予定通り午後一時に外に出て、管制塔へ行けるところまで行って占拠する。準備してくれ」と言った。皆黙っていた。

出る直前に四人で集って話をした。太田は俺が一番上まで行くが、皆も来れたら来てもいいと。それで役割分担した。太田は一番上まで行く。俺は次で蹴散らす役。津田、原は上まで行く本隊のための切り開き隊。津田と原は一階で逮捕された。

偶然が重なった成功

中川　午後一時、マンホールを飛び出して管制塔へ向かった。

実録フィルムで見たテト攻勢での解放戦線兵士にならった走り方をした（一

同笑い）。先ほどの加瀬さんのアジテーションの話もそうだが、当時はベトナム人民と共に東アジア革命を一緒に戦っているという意識だった。

宮部　どういう走り方ですか（笑い）。

中川　あるんだよ（笑い）。そして、制服警官を振り払い、管制塔ビルに入って一番上に行く前田や太田は先にエレベーターで昇った。

もう一基のエレベーターで記者が降りてきて、エレベーターがちょうど開

Vサインする中川さん

いた。そこにいた皆に声をかけて飛び乗って、それで俺と十四階組は一気に昇った。前田たちは七階あたりで止まって、階段を駆け上がった。こっちが先に着いた。

妹尾　ちょうどエレベーターが降りてきたわけ。すごい偶然だね。

吉田　管制室に入れたのは太田の功績。あの高さをよじ登って、よく怖くなかったと思う。

中川　太田が十四階からパラボラアンテナをよじ登って、片手でアンテナをつかんで片手に持ったバールで管制室のガラスを割ったから入ることができた。足場がない状況だった。後から入ったのは先に入ったのに引き上げてもらったが。

太田は最初ハンマーで殴ったら跳ね返されて、バールでガラスを突いたら割れた。太田が「開きます、開きます」

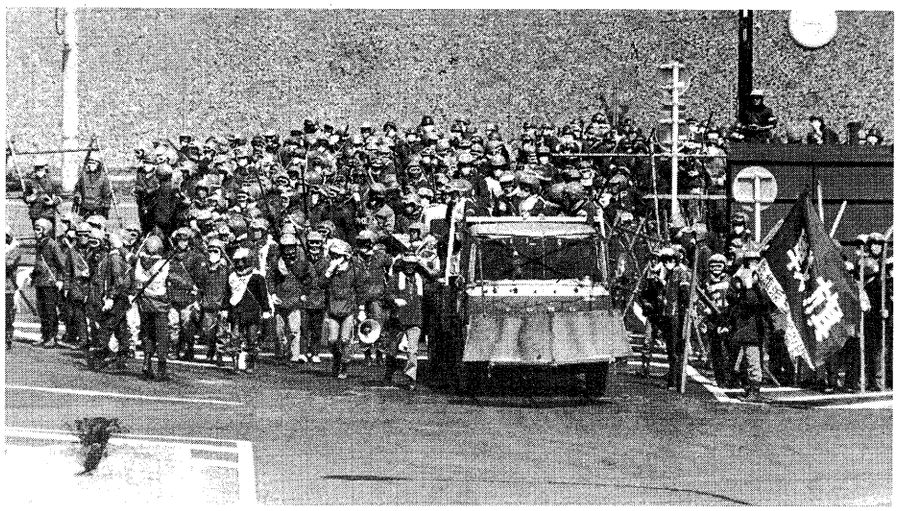
九ゲートから突入したトラック

といって、そこからガラスを破った。

大森　写真で出ているが、後から機動隊が上ってきたが、パラボラアンテナの反対側に出て部隊に気づかなかった。

中川　写真を根拠に革マル派が「謀略だ」と宣伝した。

大森　アンテナ側に来ていたら管制室に入れなかった。全く偶然だった。逆に作戦通りにやっていたら、こんなにうまくいっていない。



突入直前の第八ゲート部隊

中川　九ゲート部隊が先に突入して我々が十分遅れたのも良かった。

吉田　九ゲート部隊もパトカーの後についたから、簡単に空港の中に入ることができた。本当に偶然が重なっている。

中川　今から言えば運輸省側から管制室に電話がかかってきたんだから、対政府交渉を始めればよかった。

最初は水野が出て、切ってしまった。二回目の電話は俺が出て「ただいま占拠中」（笑い）と直ぐ切ってしまった。「責任者を出せ。我々は管制室を占拠した。開港を断念するのかしないのか。しないならば全員自害する用意がある」くらいのことをやっておけばよかったと思うよ。

大森　その時は予想以上の結果だったから、そこまで考えられなかった。

中川　和多田さんが書いているが、三・二六の後が何もなかった。

菱田から第八ゲートへ

妹尾　横堀要塞上から見ていて、八ゲートからの空港突入も引き際もすごかった。一番いいところ見させてもらった。

中川　管制室から見ていてもそうだった。まるで戦闘絵巻だった。

大森　日向派が遅れて、あの人数の部隊が移動するのにすごい時間がかかった。日向派は前日ガサ入れを受けて鉄パイプを押収されていた。それで角材を買いに行って角材を使っていた。それが原因だった。

先頭の装甲トラックで部隊の一部をピストン運送したが、それでも予定より遅れてしまった。丹波山に着いたときは、既に管制塔部隊がマンホールを

出たくらいの時間。丹波山を出発するときには東峰で煙が上がっていた。九ゲートに向かう前にインターの部隊が攻撃したもの。

当日の作戦の全体像を知っていたのはインターの数人だけだと思う。

白川　九ゲート突入の計画は知らなかった。大やけどを負った新山君が死ぬという犠牲が出たが、作戦としてはヒットだった。

中川　部隊が八ゲートまで来たところで、しばらくとまっていた。

他の計画を知っていたリーダーたちは管制塔の赤旗を見て、作戦は成功し終わったと。全体の作戦を知らない人はここまで来て引き返すのか、管制塔の連中を奪還しにいこうとなった。

大森　バリケードを二、三箇所突破したあたりで赤旗が見える。始まる前に終わっている。それで手を振ってシュプレヒコールを上げて小集会を始めた。

直ぐに撤収といわれた。装甲トラック、先鋒隊とインターが先頭で、後ろに日向派がいたが、インターの後ろの部隊と日向派はひき始めた。「帰れるか」と盛んに野次が飛ばしているのがいた。無線で連絡とって、部隊は引けないと言っているがどうするかと相談していた。

結局、突入となって、映画『大義の春』にあるように管制塔ビルの下まで攻め込んだ。

トンネルを掘り続けた三月要塞

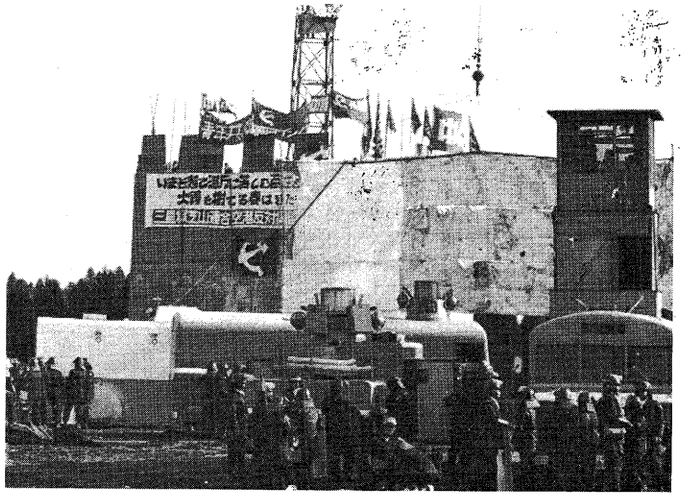
妹尾　二月要塞戦のあと、要塞建設に入れといわれて、要塞建設隊に入った。その時期はひたすら脱出用トンネルとは知らずに穴を掘り続けた。

今でも三月要塞元被告は年に二、三回集っている。こちらも資料集めをした。元被告内部でも僕らの記憶も薄れ始めていることもあり記録を残すことで、次の闘いへ結びつけていこうという意見と、現地で闘いが続いている状況で、暴露的なものを出すべきではないという意見が出ている。

吉田　三月は要塞にこもりっぱなし？

警察は部隊に向けて
ピストルを発砲した

妹尾　一ヶ月近く、こもりっ切り。なにしろ、要塞の二階以上は横の部分がまだなかった。コンクリ流して積み上げていった。三階建てで屋上があった。地下トンネルを掘った土は、一階に置いていった。掘っているのを警察は分かっていただろうが。三階トイレの便器を外すと、鉄梯子で地下トンネル入口まで下りられるようになっていた。



3月横堀要塞戦

吉田　後で写真を見て、一ヵ月でよくあそこまで造ったと思った。掘ったのは何メートル？

妹尾　正確にはわからない。二月要塞の時点ではトンネルで逃げられると思っていた。三月二五日に機動隊に囲まれた時点で、これはダメだと思った。はるか遠くまで制圧されていた。

大森　二月のように支援部隊が近づくこともできなかった。

妹尾　最初一人で、後から二人来て、プロ青同は三人。何も戦闘装備がないために、二五日前夜に外部に伝言を託した。

大森　それでヘルメットや安全靴などを届けに行った。裏道を通って、なんとか荷物を渡した。

妹尾　そう、万ちゃんが来たのにはビックリした。既に機動隊に包囲されている中を、闇にまぎれてよく突破して来たものだ。

大森　まだ機動隊が来はじめたところだった。はしごで要塞に上って、荷物を渡して、下を見たら、もうはしごを壊していた。飛び降りて林に駆け込んだ瞬間に、機動隊がワーッと殺到してきた。危うく要塞被告になるところだった。

吉田　機動隊の検問が厳しい状況でよくあれだけの物資を搬入できたものだ。

大森　普通にトラックに建設資材やドラム缶を積んで搬入した。

妹尾　要塞内にドラム缶で貯蔵されていたガソリンや薬品はすごい量だった。インターが出した人や物資がすごかった。

中川　当時の金額で三千万円という話だ。

大森　当時の金額でも億の単位。労働力は自前だから。

白川　要塞建設は何と言ってもインターの功績だ。

妹尾　インターの三分の一は同盟員ではなかった。姉が同盟員で鉄筋工の弟が要塞建設に入っていたりしていた。

　要塞の内部はすごかった。うちの団結小屋にいるよりもいい飯食えて、毎日風呂に入れて、テレビも見られる。朝番、遅番の二交代でひたすら穴掘りだから、そうでなければもたない。

吉田　最初の要塞建設隊のときから食事はプロのコックが作っていた。黒板には今日のメニューが書いてあって、おかず三品とデザートが毎日出た。うちの団結小屋では毎日くず野菜だったから（笑い）。

妹尾　三月はほぼ全党派で全体五十人くらい。反対同盟から北原鉱治、石井武、秋葉哲の三人が入った。

　お天道様も見ないで一ヵ月以上ひたすら穴を掘っていたのだけで三十七、八人いた。その人数でないと掘れない。酸素ダストとか、電気系統はインターが全部やってくれた。そうでなければできない。

白川　どういう気持ちだった？

妹尾　なんなのかな。人数ばれるから、屋上出るのは交代で日向ぼっこも自由にできないし。

中川　早くつかまったほうがいいとか。

妹尾　ただ掘っているのは逃げるための穴だというのはわかったから。

トンネルにつながる縦穴

　三月二五日に鉄塔を建て始める。機動隊に周りを囲まれて、こちらも投石していた。遅番だったので、二六日昼に寝ていたら、朝番に起されて「管制塔に赤旗が立っている」と。

　要塞から、管制塔に赤旗が立って八ゲートに部隊が突っ込んでいくのを涙を流しながら双眼鏡で見ていた。鉄パイプで鉄塔をたたきながら。

　三派はいいけど、他党派は呆然。俺たちも内心は、実はそういう計画だったんだ。俺たちは管制塔占拠のダシ

だったのか（笑い）。外の部隊は知っていると思ったから。本を読んだら、八ゲート組も九ゲート組も管制塔の計画を知らなかったらしいが。

脱出作戦の失敗

白川　でも、機動隊の最強部隊の千葉県警一機・二機は要塞に張り付いたままだった。

妹尾　要塞の上から数えたのがいて三千はいた。

白川　警察は要塞が主戦場だと思っていたわけで、機動隊は見事に空港の外へ誘い出された。

妹尾　要塞から見ていても、横堀街道を進んだ部隊が横堀要塞に向かうと、警察が誤解したのはわかる。

大森　菱田での集会のあと、横堀街道の部隊と丹波山への部隊に分かれて進んだ。横堀要塞を挟み撃ちにしようとしていると誤解したはず。「正しい判断」だ。（笑い）

白川　下手に動いたら背後を突かれると思っただろうから。そういう点でも作戦がぴたりと当たった。

吉田　二六日は機動隊の指揮系統が混乱していたから、二六日なら撤収できたのではないかという意見があるが。

妹尾　二六日の時点で逃げようという意見は出なかった。三派以外はここが死に場所だと思ってきているわけだから。

二六日に会議を開いて、トンネルを使って撤収するという同盟の方針が決まる。ところが、中核派だけは鉄塔から降りそうにないと。中核派とインターは無線で外から指示を受けていた。インターからプロ青同はどうするのかと話があって、「同盟の方針通り逃げる」と。

要塞内では途中、三階で火事を起したりした。薬品のドラム缶からビンにつめていて、誤って発火させてしまい、消火器で消し止めた。ガソリンに引火したら、やばかった。内部は煙が充満していた。

白川　機動隊の攻撃は二六日から？

妹尾　二六日は来なかった。二七日に戦闘が始まって、入ってきたのは二八日午前〇時をまわっていた。

脱出のときは逃げ遅れた労活評の一人が下に降りてきたら、鉄の扉を既に閉め切っていた。中核派とインターは鉄塔で捕まった。トンネルに下りたときはそれも知らないで、全員降りたと思っていた。

大森　八ゲートで何人か捕まったが、まだ人がいたから。要塞へ仲間を奪還しに行こうと横堀の団結小屋で議論をしていたら。Hが来て「みんな帰ってくる」と言った（笑い）。

二七日夜に見ていたら、機動隊がバーと山の方へ向かった。

妹尾　要塞に入ったら、もぬけの空で相当あわてたらしい。

ただ、トンネルは偽装含めて三本掘って、一本は前日に見つかって張られていた。トンネルの中は、発電機が止まって、二七日夜の時点で酸欠状態。相当やばかった。

和多田さんは武装解除して出てくればよかったと本で言っているが、そんな雰囲気ではなかった。

中川　反対同盟を先頭に武装解除して出てきたら。

妹尾　鉄塔建てているし、火炎瓶はあるし。戦略的に立てるなら、外から一発やって、それを合図に外に出るというのはあったかもしれないが。

白川　こちらも管制塔占拠が成功したことの衝撃で、要塞戦救出作戦まで立てられなかった。

妹尾　穴から出てくるとみんな思っていたのでしょう（笑い）。

「政治交渉」をめぐって

白川　福田政権は三・二六で一大衝撃を受けたが、四月三日に何とか五・二〇出直し開港を決めた。決断したのは自民党の実力者の福永健司運輸大臣だったと思う。

三・二六の後、開港を延期させるための政治交渉の動きが始まった。それ以前から、インターの今野と私、加瀬勉、西村卓司（長船）、吉川勇一さんらで非公式の「政治委員会」的なものを時々開いていた。三・二六後の四月の会議で、西村氏が財界の大物の桜田武（日経連専務理事）と連絡がとれたが、政治交渉の話を進めていいなというのでOKした。彼は接触した感触として、財界は三・二六で驚愕して開港延期しかないと考えているようだ。福田内閣も動揺している。もう一撃あれば、政府も再延期せざるを得ないという読みだった。財界人のほうは、戸村委員長と政府のトップ会談が可能だと考えていた。

【注：西村氏が仲介して桜田、土光敏夫、中山素平ら財界トップと戸村委員長が秘密裏に会談し、五・二〇開港を一年間延期しその間は双方が休戦す

る、財界からその線で福永大臣を説得するという合意が成立したが、財界の説得工作は失敗に終わった。その詳しい経過は私には知らされていなかったが、インターの柘植洋三君のブログ「われら共に受けてたたん――四信」（〇五年九月）が明らかにしている。【結局、五月二〇日に開港されてしまったが。】

ただ、開港延期で何本もの線から交渉の働きかけが行われていた。千葉日報が仲介して戸村さんが単独で福永と会談した。

七八年の秋から、六〇年安保の第一次ブントのルートで加藤紘一官房副長官（道正官房副長官を引き継ぐ）と松本礼二、島寛成（当時反対同盟事務局次長）に柳川秀夫（青年行動隊）が加わり水面下の政治交渉が行われ、「二期工事の凍結」の覚書まで交わされた。これが七九年七月に明らかになり衝撃を受けたが、我々はまったく知らなかった。

大森　もうひとつ、石井英祐氏による旧社会党関係のルートがあった。戦後、農村にあった4Hクラブ運動の先輩だった人物を通じて交渉した。

白川　反対同盟としては政治交渉をやるという正式決定はなかった。支援党派はもちろん一切の交渉拒否。ベトナムの解放戦線は戦争しながら交渉も進めるという方針だったが、三里塚ではそういう考えはなかった。実力闘争一本。「実力闘争をダシにして条件交渉するなどとんでもない」というのが当時の雰囲気。対政府交渉をやれと言いだせば「裏切り者」と袋だたきにされる雰囲気だった。だから、下手に政治交渉をやれば混乱するという面があった。政府側も、本当に同盟が支援党派を含めてまとめられるのかと疑っていた。

宮部　同盟と支援で政治交渉についての議論の場はなかった。

白川　一切なかった。

大森　雰囲気的には、三・二六をやって行け行けどんどん。もうカンパニアをやっている事態ではないと。実際はカンパニアを上手く使うこともできなかった。

白川　三・二六の直後に、反対同盟が「話し合い」の条件として出したのは、「逮捕者全員の釈放、開港の凍結と二期工事の中止、機動隊の現地からの撤収」という三項目だった。政府に全面譲歩を迫るもので、とても向こうが呑めるものではなかった。

宮部　三・二六のあと、直ぐ政府が「五・二〇開港」と打ち出す。それで交渉というのは難しい。交渉で何を獲得するか、はっきりしていたのか。

白川　とにかく五・二〇開港を延期させるという一点。後の島・柳川の交渉では四千メートル滑走路を認める代わりに二期工事の凍結という内容。交渉が成り立つリアリティがあるといえばあった。

しかし、三・二六で勝って五・二〇に向けて開港阻止、廃港ということでたたかっている時期に、開港を認めて二期凍結だけでよいとは言えない。

開港後も続く闘い

大森　三・二六で開港を止めたのに、譲歩できない。

宮部　開港していいとはいえない。

白川　こっちが譲歩できる線は、政府が開港を延期すれば「撃ち方やめ」、つまり空港への攻撃を停止するということ。しかし、政府が五・二〇開港に固執したわけだから、こっちは戦闘で三・二六のような大勝利をもう一度でかちとる以外にない。そうすれば政府を譲歩させられるかもしれない。それで山田レーダー基地への攻撃に賭けたが、上手くいかなかった。

加藤と島は、開港された後だから妥協可能な二期中止の線で交渉していた。政府内の強硬派が交渉内容をリークして七九年七月に読売新聞に報じられ、いったん合意した話はつぶれた。強硬派は暫定開港できたんだから、反対派を力で押さえつけろと。

中川　〇五年に管制塔の損害賠償一億円の強制執行も報じたのは読売新聞だった。この時は暫定滑走路延伸のためには、賠償が時効になってもいい、あるいは利子分は取り立てなくてもいいという意見が国交省内であった。だが、一億円取り立てて反対運動に打撃を与えろという警察庁などが、国交省が日和らないようにとリークして「強制執行へ」と読売に出た。

白川　実力闘争で勝利を収めたら次に政治的にその成果をどう確保するのかが議論されていなければならなかったが、そうした議論はなかった。そこが

我々の限界。たしかに、三・二六で勝ったのに四千メートル滑走路は認めるという大譲歩はとんでもないということになっただろうけど。

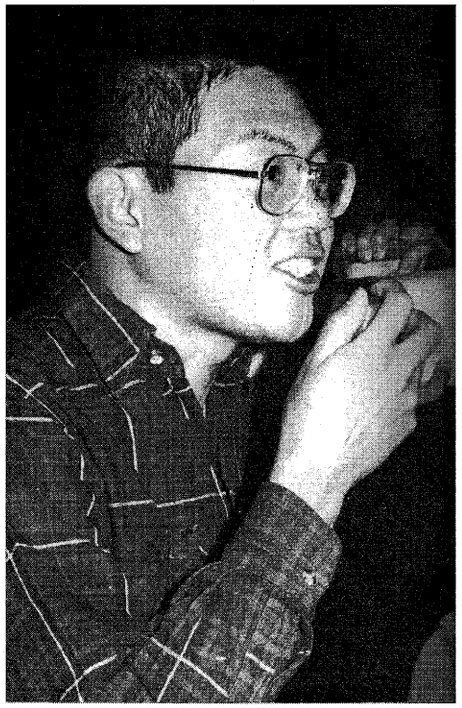
中川　それでも、反対同盟は二期を断念させたことになる。半分しか実現できなかったというべきか、半分も実現できたというべきか。

白川　九三年に公開シンポで政府は事業認定を取り下げ強制収用しないことを約束したが、あの当時の実力闘争がなかったらこれは実現しなかった。

実力闘争と政治交渉

妹尾　現実問題として、五・二〇出直し開港に向かう過程で、こちらに余力はあったのか。

白川　三・二六で目いっぱい力を使った。五・二〇へ向けて力を集中するが、戦力的に三・二六以上の闘争を組むのは難しかった。



故・原勲＝1982年4月16日死去

大森　七七年十二月から七八年三月で三十人近くの仲間が逮捕された。

中川　当時、プロ青同先鋒隊は全体でも百数十人だった。

大森　その内、戦闘部隊は八～九十人。だから、三分の一が獄中だった。

白川　我々にとってはすごい人数。三・二六の前は未決勾留は半年だったので、七七年五～八月の闘争の逮捕者は保釈されていたが、裁判中の被告に同じことをさせるわけにもいかないし（苦笑）。

　我々だけでなく、インターも目いっぱいだったと思う。

大森　人的資金的な面だけでなく、三・二六の後の方向性を、政治面、戦術面でも考えていなかった。五・二〇開港と向こうが出したのに対してどうするか。三・二六のような準備がなかった。

妹尾　そもそも管制塔占拠ができると思っていなかった。大半は、そのまま三・三〇開港と思っていた。

大森　開港阻止決戦だが、次に何をやるかのイメージがない。

白川　新左翼は敗北した経験しかない。勝った経験がないから、勝ったらどうするかということで悩まない（苦笑）。華々しく散るという心性。

大森　新左翼はぶち壊すのは得意だが、創り出すのは苦手。

　三・二六の後は俺が話を付けてやるという政治ゴロのようなのがたくさん来る。

白川　だから、その後の石橋（反対同盟副委員長）や内田（行動隊長）の水面下の話し合いなどがバラバラに出てくる。後知恵だが、実力闘争を続けながら政府に譲歩を迫る交渉をいつ、どのように行うのかという原則を定めるべきだった。このことは、十年ぐらい前に論文で書いたけど。

　政治交渉をやることを公然と決めて、代表者に交渉させればよかった。

宮部　むしろ、公然とやれば良かったと思う。

白川　同盟はこの時期を逃しては交渉できないし、二期を止める手はないと直感的に思っていたと思う。しかし、支援の手前、表立っては言えないし、建前は「話し合い絶対反対」。そのため同盟幹部による秘密裡の交渉が繰り返され、ますます疑いと混乱を呼ぶことになった。

大森　当時の雰囲気で思い出すのは団結小屋の代表による支援連（現地支援連絡会議）での論争。当時十いくつの支援党派の中で中郷団結小屋（共産主義人民連帯）だけが「武装闘争と同時に政治戦があってもいい」と政治交渉を主張した。彼らは毛沢東思想で中国の人民服を着てピンと背を伸ばした姿勢で対応していた。

　結局、「今こそ実力闘争だ」と批判が集中。中核派は「交渉を主張するなら反革命とみなす」とまで言っていた。彼らも自己批判はしなかったが、それ以上主張せず、事実上撤回した。他派も具体的な廃港の展望があるわけではないのに、話し合いなんかとんでもないというのが支援全体の雰囲気だった。

宮部　住民闘争や労働争議でも相手と交渉するのは普通のことだ。

白川　三里塚は非妥協の闘いとシンボル化されていたから、重荷を負わされる。ふつうは個別の闘争で全面勝利はないから、どこかで妥協することが許されるんだが、三里塚はそうはいかない。後に公開シンポを推進した石毛博道は「持ち上げられすぎて降りられなくなった」と表現していた。二期を中止して強制収用をさせないというだけでも、大きな勝利なのだが。

吉田　砂川闘争のような勝利による全面返還をイメージしていた。だが、あれは例外で住民闘争の多くは負けている。

白川　秋葉哲さんはよく「そのうち羽田に全面移転する」と言っていた。粘っていればなんとかなると思っていた。当時から国際線羽田移転があっても貨物空港としては残るだろうと言われていた。

五・二〇出直し開港との闘い

中川　本に出てくるが、和多田さんは、プロ青同の提案した山田レーダーサイトの作戦を三・二六後にすぐやるべきだったと。

吉田　「たられば」の話だが、和多田さんが言うように、十四階のコンピューターと山田レーダーをやっていれば五・二〇開港もできなかった。

白川　必ずそうなったとは言えない。山田レーダー基地への攻撃計画は三・二六の前からあったが、実際にやったのは五月になってから。

大森　インターとの共同作戦だったが、こっちで行ったのは十人ほど。途中停車した場所が暴走族のたまり場になっていて、からんできた。指揮していたAが対応したが、しびれを切らして「部隊降りろ」と怒鳴って、ヘルメット覆面姿の全員がトラックの荷台から降りたら暴走族が逃げてしまった。彼らが警察に通報したので作戦を断念した。通報したのもシンナーかなんかをやっていていなくなってしまった。

白川　三・二六で警察がピストルを使ってきたから、こちら側に犠牲者が

一坪共有地に建つ木の根ペンション

出るのではないかすごく神経を使った。全員分はそろえられなかったが、防弾チョッキを着用した。

大森　実際は十着くらいしか用意できず、盾をつくった。木の板にジュラルミンの板を打ちつけ、取っ手を付けた。盾を第一中隊が持ち、第二中隊に防弾チョッキを渡した。その盾をもって山田に向かった。「顔さえ見えなければ怖くないぞ」（笑い）と。

管制塔の原君が獄中でしんどくなったと言うのもあって、もう一度意志確認をした。行動する際、中隊・小隊と部隊編成を毎回していたが、小隊ごとに意志統一した。

どうしてもできないという場合は隊を離れることを認める、無理強いするなと。「ピストルが出ているがいいか。それでも今回の闘争に参加するか」と一人ひとり確認した。それから、五・二〇に参加した。

妹尾　原がしんどいという話は既に出ていたのか？

大森　父親、おじが社会党の関係で勾留理由開示公判に激励にきた。自供したという話が流れて、弁護士を通して喋るなといわれたことで、逆にしんどくなったのではないかと勝手に推測していたが。

白川　原は一部喋ったが、別の人間に弾圧が波及するようなことは喋ってない。

管制塔被告でもインターや日向派は全面自供したメンバーがいたから大変だったと思う。

大森　五・二〇よりも後の話だが、筑波レーダーへの作戦を行った。

下見に行って観光客のふりをして筑波山に登って、隣を見たら、同じく他党派が調査に来ていた（笑い）。

作戦のときに、まず外にいたガードマンを押さえた。動くなと指示するときに、喋ったやつが興奮して方言丸出しだった（笑い）。

中に入ると、一室に下着姿の機動隊員が七、八人いた。警察も来ると思ってないから就寝中だった。警官の一人がメンバーの一人にだきついてきて離さない。ふりほどいて部屋から引き、機械を壊して引き上げた。

開港後のたたかい

白川　三・二六の後は飛行阻止闘争を共同してやった。空港南側の岩山でアドバルーンをあげ、古タイヤを燃やす。支援党派間で抜け駆けなしで協調して取り組めた。

大森　集会の度に松明デモをやって、後ろでアドバルーンを揚げる。坂志岡団結小屋（労学連）や中核派などとも一緒にやった。

宮部　花火も上げていた。

白川　飛行阻止行動のための実行委員会の会議が行われた。全国一般南部の設楽が中心で、中核派も代表が来ていた。

大森　飛行阻止行動のために連帯する会の関西の学生が来て何十人と労農合宿所に泊まっていた。岩山記念館の前に集って、アドバルーンとか揚げているとがけの上から権力が来る。来るのを見越してちょっかいをかける。

ある時、打ち上げていた花火を機動隊めがけて打ち込んで、機動隊が一斉に逃げる。その次の集会のとき、あまり飛行阻止行動をやっていなかった解放派が先頭で行ったら、暗闇で機動隊が待ち伏せしていたということがあった。

それから、南北から挟撃する行動もあった。

白川　北側から止めるというので、野毛平での飛行阻止の行動を組んで、部隊で機動隊を攻撃した。

宮部　南側だけの行動では空港を止められないと。北側に行ってアドバルーンを揚げていた。

白川　六〇年代の新左翼の運動ではどこかが突出した闘争をやると、他の勢力が「追いつき追い越せ」と、それを上回る闘争をやろうとして全体に波及していくというのがあった。

だけど、三・二六の後ではそういうダイナミズムは起こらなかった。我々の組織が大きくならなかったのは、我々自身の問題もあるが、そういうダイナミズムが起きなかったことが大きい。

大森　我々は運動の理屈は創るが、組織作りは昔からうまくない（苦笑）。

吉田　うまく組織化したのは日向派くらい。それまで第二部隊だったが。

中川　中核派はやろうと思えばできたと思うが。

白川　中核派は八五年に空港突入の戦闘を三里塚交差点でやったんだけど、三・二六の直ぐ後になぜあの闘争をやらなかったのかと思う。対革マルの内ゲバが足を引っ張っていたのかもしれないが。やっておれば、状況もかなり変わったはず。

インターもあれだけの犠牲を出していたから、五・二〇に向けて同じような戦闘を二度も三度もできなかった。

反暴力キャンペーンと実力闘争の終焉

宮部　政治交渉の話にからむが。実力闘争で大きくやった。その勢いが人々の共感を呼んで、もう一押しするという雰囲気は既になかった。三・二六を非難する国会決議のとき、反対したのは参議院の青島幸男だけだった（参院は七八年四月十日、衆院は全会一致で四月六日）。その後、団結小屋を「除去」するための成田治安法（新東京国際空港の安全確保に関する緊急措置法）がつくられる（七八年五月十三日施行。社共が反対）。

現在、実力闘争はないに等しいが、実力闘争的なものへの否定的な雰囲気は三十年前既にあったのだろうか。

白川　当時はよく分からなかったが、三・二六を頂点に実力闘争は下り坂になった。ただ、八〇年代に入っても全国で原発のヒヤリング阻止闘争などでは、実力阻止のためにヒヤリング会場前に座り込んだ。

宮部　いま映画公開中だが、韓国の光州蜂起（八〇年）もあった。

白川　国際的に見たらフィリピンなどでもまだ武装解放闘争が高揚していたから、実力闘争は当たり前という感覚。渦中にいたから、三・二六が実力闘争の頂点だったというのは分らなかった。まだ可能性があると期待していた。

宮部　日本ではその後ない。

白川　愛知の境川流域下水道建設阻止の闘争なども、住民と一緒に阻止のために座り込みをした。

実力闘争をしないとはっきり打ち出したのは、八〇年代の逗子の米軍住宅反対闘争。支援を受けいれず、リコールや選挙という合法的な手段を使って、住民運動が市長をとった。

宮部　最近だと吉野川可動堰反対運動。選挙や住民投票など制度的な手法で運動する。

吉田　非暴力直接行動で言うと、辺野古のたたかいが唯一。支援もいるが、

管制塔元被告への強制執行をはね返した一億円カンパ運動＝二〇〇五年十一月十一日

少ない。

大森　三里塚の場合、強制代執行阻止までは反対同盟が前面に出て、それに新左翼、労働組合、住民運動が合流する。説明しなくても、反権力・住民闘争で国家権力＝悪というが分かる。三・二六もその延長線。だが、主力の部隊は新左翼。

住民闘争の中では「三里塚のように闘おう」という合言葉があったが、もうひとつで「三里塚のようになったら大変だ」というのがあった。

宮部　間違いなくそう。

大森　私たちが三・二六の後に「第二、第三の三里塚を」と出した。

それは三・二六のようなことをやればいいのか、運動を作り上げたらいいのかよく解らなかった。暴れて来いといわれれば暴れられるが、方向喪失感があった。

根拠地から地方分権

宮部　当時の理屈として、私たちは「根拠地論」を出していた。地域の空間を農業と生活を基盤に対抗社会的につくり、かつ武装する。それを全国に創って連携するというイメージ。

地域に問題意識は行ったが、モデル、ビジョンを作り出すきっかけはほぼなかった。

白川　今では地域が小泉「改革」によってどんどん切り捨てられてきているから、これに抗して住民の手で地域おこしの運動が生まれている。実力闘争はないが、新しい社会のモデルを創る試みは、たくさん出てきている。

宮部　七〇年代当時はケインズ主義的、中央集権的な開発主義できた。その後、グローバリゼーションで地域が見捨てられるような状況の中での地域自立・分権と、問題意識はつながっている。

でも、国家権力が攻めてきての「闘争」とは違う。八〇年代後半からグローバリゼーションで違う資本主義システムになっている。儲かるところは儲かり、そうでないところは切り捨てられる。対抗線を引きづらい。実力闘争で対峙する時代でなくなった。

白川　抵抗と自立はあるんだが、実力闘争はなくなった。

宮部　理由は？

白川　実力闘争を担った新左翼の政治部隊がほとんど消滅したこともあるが、第三世界の武装解放闘争が行き詰ったり、変質したことが大きい。実力闘争は武装闘争とは違うし、非暴力直接行動の一種だと言えるが、やはり抵抗の暴力。暴力によって解放はかちとれないことが歴史的に明らかになった。

大森　三里塚や新左翼の周りにもっと

分厚い層がいると思ったが、反暴力キャンペーンに押しつぶされていく。

宮部　七〇年代新左翼のイメージは「連赤・内ゲバ・爆弾」。新左翼や党派のイメージが凋落する中で新左翼の最も良心的な部分が三・二六をやった。しかし、それに続く部分も、新たな広がりもなかった。

白川　八〇年代になるとロケット弾でのゲリラがやたら増える。我々はやってもしょうがないとやらなかった。

宮部　成田治安法による団結小屋破壊に対して闘うというある種矮小化された形での実力闘争しかなかった。

三十年の記憶と現代

妹尾　三・二六で勝利して、我々も「第二、第三の三里塚」と出すが第二の三・二六はできない現状と「三里塚のようになったら大変だ」という意識。

三・二六を実現したのは党派、党だ。そこに上り詰める過程の党のあり方の総括が必要だ。今回の本を読んでも、やった人間が出てきて時系列で話をしているだけ。「根拠地論」を打ち出した我々がどう総括するのか。

全国各地で「第二、第三の三里塚を」と「三里塚のようになったら…」というのが大衆運動を含めた形での影響があったと思う。それが何なのかはわからない。

宮部　実力闘争がなぜ生まれるか。非妥協的な価値観と正義。映画『大義の春』のタイトルにあるとおり、問答無用の対決・攻防がある時代にはじめて実力闘争がある。

八〇年代に入ると、物事を相対化して見る。そして、八九年天安門、ベルリンの壁にいたる。

実力闘争、武装闘争で命をかけて相手とぶつかるまで行くには、正義につ

暫定滑走路北側延伸に反対する三里塚・東峰現地行動＝二〇〇八年四月一三日

いて信念がないと。今の時代は、正義なんかうさんくさいという時代の雰囲気がある。それがあるのは宗教原理主義の「テロ」となってしまう。

当時のビジョンが社会主義だったのははっきりしている。社会主義のダメな要素、前衛党のとらえなおしをしようという議論はしてきた。歴史の大きな流れの中では、流れに追いつかないものだったが。

実力闘争は非妥協的。農民にとって「農地死守」という、ここで生きてきた農民にとってここで生活していくために金に変えられない価値がある農地を守るという非妥協的な要素がある。

新左翼としてはベトナム反戦以来の反戦、反帝国主義的な正義感・価値観。もちろん、三里塚の中で自分たちの党のあり方を見直すというのはあったが、非妥協的な価値観がなかったら、命がけで実力闘争はできない。

その後は九五年が象徴するように、一方でオウム真理教がサリンを撒いて、一方で震災でNGOが多数出てくる。

現在は、実力闘争から何かが生まれるという雰囲気はなくなっている。実力闘争は当分来ない。

妹尾　世界的にそうだ。

白川　武装解放闘争が挫折し実力闘争も姿を消したが、抵抗や闘争がなくなったわけではない。非暴力の直接行動はあちこちで盛り上がっている。ただ、日本の運動だけは落ち込んでいるが。

吉田　我々のような新左翼は住民闘争への助っ人集団だった。新左翼は高齢化で解体し、社会的に見える存在としてはない。

今の時代の住民運動では、解決をめざす方法は政治か裁判。国会へ行くとロビイングにきている住民運動グループがたくさんいる。

いま、助っ人機能はNGOが担っている。彼らも政治力とマスコミを使えるかどうかがせいぜい。機能が縮小している。

白川　三里塚は農民がいなかったら闘争にならないわけで、無党派で支援に駆けつけた人が大勢いた。だけど、その人たちだけであれだけの運動ができたかというと難しかったと思う。党派だから実力闘争ができたという側面は間違いなくあるが、マイナス面は何だったのか。みんなは党の指示で逮捕覚悟の闘争に参加したわけだが、それだけで参加したわけではない。

大森　「破私立公」の精神で参加していたと思う。

宮部　懐かしい言葉（笑い）。

大森　党や社会主義に殉ずるというよりも、三里塚の大義のためと。

妹尾　僕は違う。当時は三里塚から革命が起きると思い込んでいた。

白川　三里塚だからというのがあった。三里塚闘争に世の中をラディカルに変える闘争というリアリティがあったから、党で決めたことに従おうということになったと思う。党のためにだけで、あれしろこれしろだったら動かなかった。

宮部　三里塚は地域空間があって、連帯があった。今の時代はそういうモデルが見えづらい。地域でいえば、行政制度的には田中康夫みたいな分権社会の試みなどもあったが。

今の時代、格差社会でワーキングプアが社会問題化し、運動も起きてきている。今の時代だと、やはり反格差だと思う。生存は非妥協だから。

白川　独立系の「自由と生存のメーデー」に参加したが、圧倒的に若者が多く熱気がある。フリーターなど非正規労働者の運動に立ち上がった若者は、今までまともな仕事に就けないのは自分が悪いと思ってきた。それが社会が悪い、経営者が悪いと気がついた。スペースやユニオンに行くと相談できる仲間がいる、自分だけじゃないんだと感じるという。その連帯感が重要。

妹尾　去年（〇七年）からの年金、保険の問題を見ても、変える方向に人々の火がつくような横のつながりがなかなかできない。

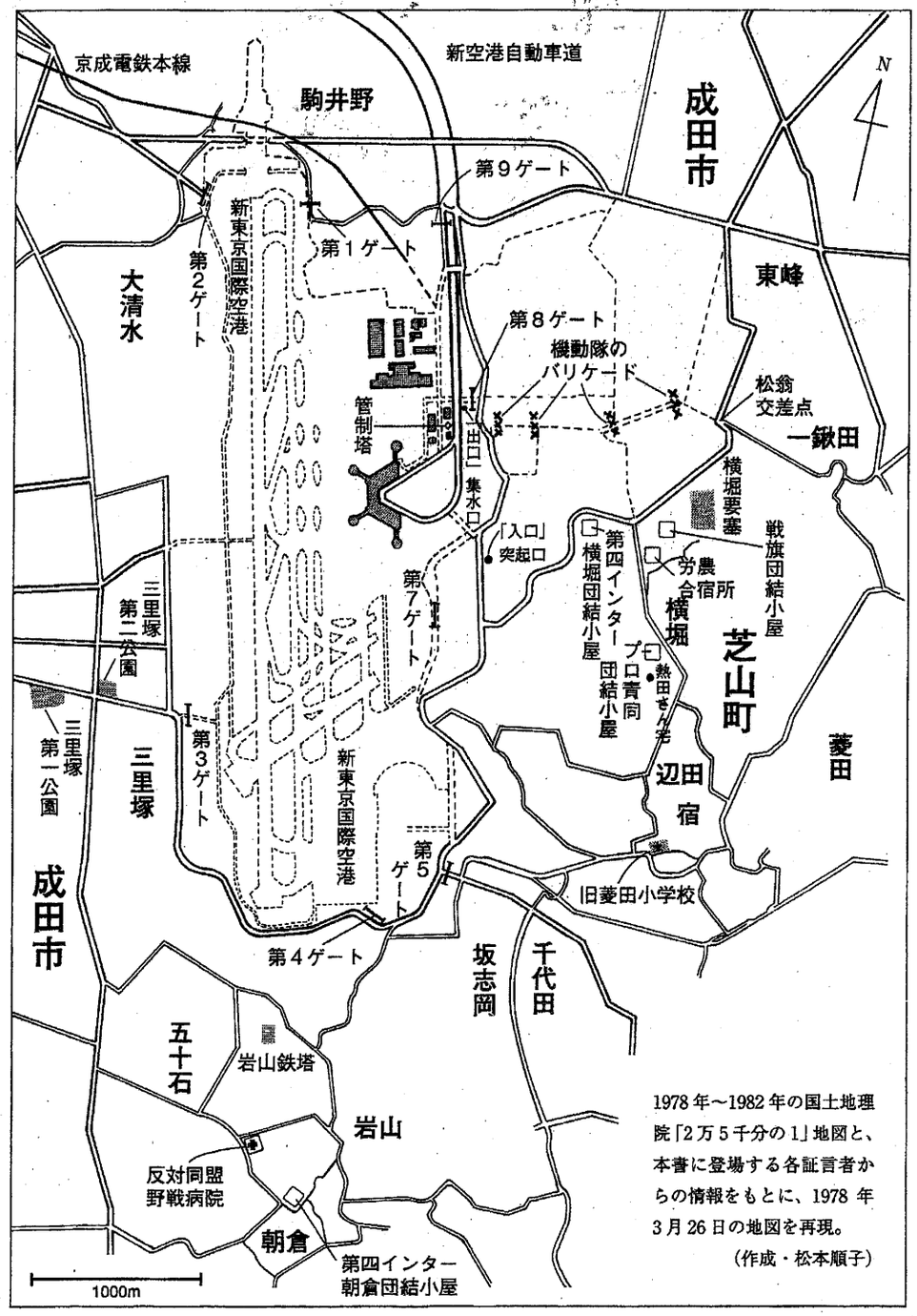
宮部　自民党が大敗北した昨年（〇七年）の参院選挙を見ても、運動、対抗社会形成、制度圏の三つがうまく結合・連携しないと社会を変えるのは難しい。時代的に一つだけではうまくいかない。

吉田　我々も五～六十代になってどうするわけ。経験を語る語り部か（笑い）。

中川　三・二六の語り部としては、次は映画を計画している。

（了）

（この座談会は、三・二六管制塔闘争から三〇年後の二〇〇八年五月十二日に行われたものである。）



1978年～1982年の国土地理院「2万5千分の1」地図と、本書に登場する各証言者からの情報をもとに、1978年3月26日の地図を再現。
（作成・松本順子）

三里塚・成田周辺地図

『1978・3・26　NARITA』（結書房）から転載

一九七七年～七八年三里塚決戦の軌跡

77年1月～79年12月闘争小史

一九七七年

1・19　鉄塔決戦の火ぶた切られる。公団は機動隊に守られて鉄塔破壊道路建設に本格的着工。阻止闘争に一五〇〇名結集。朝六時出動した機動隊に対し、プロ青同部隊は真先に町道へ駆け降り、竹ざおと投石で闘う。その後一日中鉄塔前で対時。

2・6　「鉄塔破壊道路建設阻止・鉄塔決戦勝利緊急集会」に全国から四八〇〇名結集。夜、第五ゲートに攻撃が加えられ、焼きうち。

2・14～　反対同盟の七五万枚の新聞全国に配布される。

2・26　「三里塚・『むつ』を闘う全国活動者会議」が一八〇名の結集で開かれる。

2・27　町田公団副総裁宅に発煙筒。

3・27　「鉄塔仮処分阻止、強制撤去粉砕第三波現地行動」に四二〇〇名結集。

3・28　動労千葉、ジェット燃料貨車輸送阻止スト貫徹。

4・17　三里塚現地闘争に二万三千名結集。三里塚闘争史上最大の結集。三里塚交差点をはじめ各所で機動隊と衝突。連帯する会は四千名の大結集。夜、青年共闘が鉄塔台地で戦闘。

5・6　岩山大鉄塔闇討ち破壊。プロ青同部隊は午前四時、真先に岩山に到着。反対同盟とともにただちに抗議行動とバリケードの排除にかかる。何の警告もなく突如として機動隊の放水が始まり、ガス銃を水平撃ちで乱射して襲いかかってくる。竹ざおと投石で対抗し、機動隊を番神三差路まで押しもどす。

午後、公団本部突入。空港内へ突入。岩山での戦闘が中核派によって展開される。

夜、プロ青同三里塚現闘団の呼びかけで三里塚を闘う青年先鋒隊結成。

夜、航空保安研修センターが攻撃され炎上。

横芝・荒海アウターマーカー施設に攻撃。

5・7　YS11の試験飛行飛来に対し、古タイヤが燃やされ天を焦がす怒りの黒煙が上がる。空港第二・三・八ゲートにゲリラ攻撃。

5・8 総反撃の日が来た。プロ青同と青年先鋒隊は、空港第五ゲートと滑走路をめざし進撃する。千代田農協前に阻止線をはる機動隊はガス銃と盾をかまえてぶ厚い阻止線をはる。午前十一時、投石と火炎ビンの攻撃で機動隊の阻止線を後退させて前進する。連帯する会行動隊も投石で前進。三十分の激闘。青年共闘は、坂志岡方向から第五ゲートへ進撃する。

午後、連帯する会の一五〇〇名の部隊で再度第五ゲートへ進撃開始。青年先鋒隊は文字通り「最先鋒」として機動隊の阻止線を後退させて突撃。二五〇〇名の投石に機動隊は総くずれとなり、第五ゲートまで後退。第五ゲート前をうめつくす総進撃を実現する。東山薫君が、ガス銃によって虐殺される。二名の先鋒隊戦士が不当逮捕。（後、令状逮捕一名）

5・29 三里塚空港粉砕！東山薫君虐殺糾弾！全国総決起集会に一万八千名結集。青年先鋒隊は坂志岡団結小屋の仲間らとともに、デモ解散後岩山鉄塔跡地の機動隊を痛撃。東山君の虐殺に対する報復に立ちあがる。

7・24 早朝、第五ゲートが攻撃され、私服の乗用車二台が炎上。三里塚空港粉砕！開港実力阻止！ジェット燃料貨車輸送阻止現地総決起集会に一万名が結集。プロ青同・青年先鋒隊はデモ終了後ただちに転戦。資材輸送道路にバリケードを構築し、第六ゲートと空港内変電施設に火炎ビン攻撃。ゲートの上に戦闘旗が立てられる。

8・6 守谷ボルタック焼き打ち全焼。横芝アウターマーカーが攻撃される。（ボルタック＝VORTACは航空保安無線施設の一つ）

8・7 ジャンポ試験飛行阻止第一日目。早朝から六〇〇名の武装部隊が野戦病院前を制圧。午前十時前、「廃港にむけ更に前進す」と書かれたアドバルーンが進入路の空高く上げられる。第三・第七・第八ダート前では反対同盟の坐り込み闘争が終日展開される。

移動中の第八ゲート部隊

岩山では古タイヤが燃やされ黒煙が上がる。試験飛行は大幅に変更。

午後〇時五〇分。青年先鋒隊と青年共闘の一五〇名の武装部隊は、五台のトラックで第五ゲートに実力攻撃を加える。三ケ所の検問を次々に突破した部隊は、第五ゲート前の機動隊一個大隊を撃破。放水車二台を完全に炎上させる。

空港消防署に火炎ビン攻撃。横芝アウターマーカーに火炎ビン攻撃（事務所・乗用車炎上）

8・8 午前九時半、再びアドバルーンが岩山に上がる。反対同盟は、再度ゲート前坐り込み。テスト飛行の中止を闘いとる。十一時、青年先鋒隊は武装して、アドバルーン撤去に出動した機動隊を迎撃。台宿方向の敵をクギづけにする。アドバルーンは無事撤収。三戦士不当逮捕。

8・9 塵島パイプライン炎上。

8・10 午前十時アドバルーンが進入路上空へ。青年先鋒隊は出動した機動隊を迎撃。

夜、八の一ゲートガードマンボックス炎上。出動した機動隊の警備車が待ち伏せ攻撃て炎上。日航常務富田宅に火炎ビン攻撃・全焼。

9・18～10・9 三里塚全国大行進。

10・8 八の二ゲート攻撃さる。ガードマンボックス全焼。

10・9 「三里塚空港粉砕！ジェット燃料貨車輸送阻止、開港阻止現地総決起集会」に二万名が結集。七〇〇キロを二十二日間にわたって踏破した三里塚行進隊を迎えて熱気のこもった集会。

夜、青年先鋒隊の別動隊・数十名は第七ゲートへ進撃し、遭遇した機動隊に攻撃を加えて撃退。

10・24 太子ボルタック焼き打ち全焼。

11・25 政府「三・三〇開港宣言」

11・26 小泉よねばあちゃんの畑の強制代執行の仮処分申請。

11・29 空港消防署火炎ビン攻撃。

11・30 山田レーダー基地とビル建設飯場の焼きうち。

12・3 福田政権、「成田三・三〇開港」のノータム（航空情報）を出す。

12・21～12・21 騒音再テスト・慣熟飛行込み。午前十一時からアドバルーンが岩山に上る。青年先鋒隊は台宿三叉路で待ち構え、アドバルーン撤去に出動した機動隊三〇〇を迎え撃つ。十一時二〇分、進路にバリケードを築き、投石、火炎ビンで攻撃開始。敵は一歩も動けず、裏道を通って挟撃ちにしようとするが、青年先鋒隊は鉄パイプと火炎ビンで撃破。

午後一時三〇分、ついに空港突入戦が開始された。わが青年先鋒隊突撃小隊は、着陸しているDC10の真正面、第二ゲートに近い所で鉄条網と二重フェンスで堅固に守られた城壁を突破。幅二メートルにわたって切り倒し、乗用車一台をもって突撃を試みる。激闘のすえ同志六名が逮捕さる。

空港フェンスの草地放火。八の一ゲートに火炎ビン攻撃が行なわれる。

12・22 第三ゲート前での坐り込み。反対同盟は途中から農協移転策動弾劾行

動。岩山ではアドバルーン闘争。連帯する会行動隊は岩山で機動隊を迎え撃つ。

夜、青年先鋒隊は第七ゲートを急襲。ゲート前のバリケードをはずし、ガードマンボックス・仮眠所を全焼させる。

12・26 大木よねの「闘魂の畑」に強制代執行。青年先鋒隊は真先に登場してバリケードをはずし抗議行動を展開。

一九七八年

2・6～7 横堀要塞戦・四〇時間の激闘・勝利

2・5 横堀要塞に鉄塔立つ。「こちらからケンカを売り三月決戦の口火を攻勢的に切って落とす」ために二〇メートルの鉄塔が要塞の上にすえつけられる。早朝から防衛闘争。反対同盟を先頭に徹底抗戦の意志を固める。

2・6 公団・機動隊が撤去に出動。青年先鋒隊、資材輸送道路上で待ち伏せ攻撃。装甲車一台炎上。青年共闘は公民館前で待ち伏せ攻撃。要塞でも徹底抗戦開始。放水とガス銃に対し、火炎ビンと投石で対抗。反対同盟の熱田一副行動隊長、二期工区の小川源さん、長谷川タケ婦人行動隊長、小川むつ婦人行動隊副隊長ら六名が要塞上で演説。

午前七時、横堀街道で最初の激闘、引き続き対時。要塞下ては、クレーン車の前に婦人行動隊が坐り込む。機動隊の盾で石井節子さん重傷。要塞は、機動隊を寄せつけることなく抗戦。

午前十時十分。空港第五ゲートに火炎ビン攻撃。

午前十時五十分。第二ゲートで私服二名の乗用車に火炎ビン。私服二名は大やけど。

午後二時二十分。空港第五ゲートにトラックで火炎ビン攻撃。

午後三時十分、要塞への敵の総攻撃。五十分の戦闘で撃退。

午後四時、青年先鋒隊、青年共闘二〇〇名横堀街道を進撃。阻止線をはる機動隊に対して猛攻を加え機動隊を撃破。要塞上から歓声が上がる。

午後六時、トンネル作業車での攻撃を撃退、完全に炎上させる。

午後十時、要塞部分の徹底抗戦終了。反対同盟六名と青年先鋒隊、青年共闘、労共闘の要塞死守隊不当逮捕。鉄塔死守隊四名、更に徹底抗戦を続行。

午後十一時半、権力の鉄塔四戦士に対する殺人攻撃に対し、青年先鋒隊は桜台前線指揮所と第五ゲートを火炎ビン攻撃。

2・7 青年先鋒隊と青年共闘の鉄塔死守隊四名は不屈の闘魂で闘う。

午前十一時半、青年先鋒隊は朝日台三叉路からトラックで要塞直下の機動隊に火炎ビンで攻撃。鉄塔から歓声。

午後九時、青年先鋒隊と青年共闘の部隊は鉄パイプ、火炎ビンで横堀公民館前の機動隊を撃破。

午後九時半、鉄塔死守隊四戦士、勝利の撤収。この日、動労千葉は十二時間スト貫徹。

2・25 空港内の給油センター横の防音林焼きうち。

3・1 午前九時、佐倉機関区前での動労集会に三千名結集。

午後一時、「三里塚決戦勝利現地総決起―戦闘宣言集会」（三里塚第一公園）に全国から九三〇〇名結集。

午後四時半、辺田部落内で先鋒隊、青年共闘、連帯する会、廃港要求宣言の会など三千人が集会。集会後、横堀へデモ。空港包囲・突入・占拠へ決意。

夜、保安訓練センター、第五ゲート、成田用水工事現場に火炎ビン攻撃。

3・2 成田駅にジェット燃料輸送抗議行動。

3・12 東関東自動車道に火炎トラック。

3・1 鹿島ルートからのジェット燃料輸送貨車に火炎トラックが衝突。

3・17 鹿島ルートからの貨車に松の立ち木が倒される。

3・21 線路上に妨害物がおかれる。

3・25 早朝横堀要塞に「今ぞ起て減反に苦しむ百姓も大義を樹てる春はきた」の垂れ幕をはじめ赤旗が林立。正午から鉄搭建設開始され、二〇メートルに及ぶ。

夜、権力・公団は重機を入れ、ガス銃で攻撃開始。要塞上からは大きなパチンコで鉄筋のモリ・鉄片・石をとばす。この日は権力はついに近寄ることもできず、機動隊の最精鋭を次々に要塞周辺に集中。

3・26 要塞は依然健在。敵の主力を引きつけて徹底抗戦を続行。

午前十時、菱田小学校跡地で「開港阻止決戦勝利、空港包囲大行動三・二六総決起集会」が連帯する会、廃港要求宣言の会、開港阻止労働者現地行動調整委の主催で開かれ、三千名が結集。

正午、集会を終え、青年先鋒隊、青学共闘、労共闘の約千名は丹波山へ、連帯する会千五百名は横堀へ、労働者部隊は辺田へ、残りの人々は第一公園へ向かう。

午後〇時五五分、東峰から天をつく勢いで黒煙が上がる。小見川県道をトラック二台が封鎖・炎上し、周囲の山林も燃上る。総攻撃＝テト攻勢が開始された。空港へ春雷の如く突入せんと全ての戦士が行動を開始する。

一時、青年先鋒隊・青学共闘・労共闘の一千名の最精鋭の武装部隊が丹波山へ登場。資材輸送道路にバリケードを築き、両側面からの敵に対する防衛隊四〇〇名を配置。主力軍六〇〇名は一路空港へ。

一時過ぎ、二台のトラックが第九ゲートを突破し、管理ビルへ。

一時過ぎ、青年先鋒隊・青年共闘・労共闘の突撃隊が、管理棟裏のマンホールから浮上し、一挙に管理ビルへ。エレベーターで十三階迄上がりテラスに出る。

一時二五分、テラスに「先鋒隊」の赤旗がひるがえる。そして一六階管制塔を占拠。ついに勝利の赤旗が管制塔にひるがえった。主力軍六〇〇は第八ゲートを突破。

一時十五分、保安研修センターで四百名が火炎ビン攻撃。出動した機動隊を撃破。

一時十五分、横堀街道で連帯する会が機動隊と激闘。その後武装対時。

一時三〇分、主力軍の最精鋭四〇〇が管理棟前のメインストリートに到着。青年先鋒隊が一番槍で突撃を開始。武装装甲トラック二台は、空港警察署の正面に激突。三〇分にわたる白兵戦でメインストリートは解放区となり、管制塔占拠戦士は勝利のVサイン。

二時、丹波山防衛隊は、主力軍の背後に回ろうとする機動隊を迎え撃ち撃破する。

三時、第一公園からのデモ隊、空港周辺を炎上させながらデモ行進。空港は大包囲された。

三時四〇分、管制塔占拠戦士、二時間半の占拠の後、不当逮捕。

3・27 横堀要塞への敵の総攻撃。午後八時、要塞が制圧され、鉄塔上の五戦士と要塞内の戦士が不当にも逮捕。

夜中、抜け穴が発見され、四十一名の戦士が不当逮捕。

3・28 反対同盟、運輸省へ抗議行動。

5・5 空港突入・管制塔占拠！人民は勝利する東京報告集会。東京勤労福祉会館に一五〇人。プロ青同・先鋒隊が主催。

5・17 五・二〇出直し強行開港阻止、五・一七全国総決起集会。代々木公園に一万五千人が結集。

5・20 出直し開港粉砕現地総決起集会。三里塚第一公園、二万二千人が大デモ。

デモ解散地点の菱田小学校跡地で連帯する会・先鋒隊は戦闘態勢に。連帯する会の一部は横堀。労調委と連帯する会の一部は第六ゲートへ。

先鋒隊・青年共闘・労共闘・連帯する会の大部分は第五ゲートへ。先鋒隊戦士と火炎瓶を載せたトラックを先頭に第五ゲートへ。第五ゲート前路上は火の海に。

午後八時、山田レーダー基地に攻撃。

午後九時、御宿ボルタックが攻撃を受け炎上。

6・10 反対同盟「百日間戦闘宣言」

岩山小鉄塔跡、野戦病院前などで古タイヤ炎上。同時刻、アドバルーン上がる。空港北側にもアドバルーン。午後九時から十時まで離発着、完全ストップ。

6・11 同盟先頭にタイマツデモ。

6・14 新山幸男反対同盟葬。

6・17 岩山で古タイヤ炎上。

6・23 筑波山山頂の運輸省筑波無線中継所にゲリラ攻撃。

6・24 成田市と富里村の東電鉄塔切断のゲリラ攻撃。

6・25 トラクター・耕運機デモ。

7・2 百日間戦闘勝利　七・二飛行阻止現地総決起集会。三里塚第一公園に一万五千人。デモ隊全体が座り込み。飛行機運行が一時間半ストップ。四十数人不当逮捕。午後四時過ぎ、朝倉に二個の気球。岩山で古タイヤ炎上。

午後二時過ぎ、火炎車が第九ゲートに突入。

7・29 週末闘争。空港北側に連ねた大きな風船。空港北側には自動発火装置を装備した古タイヤを満載したトラック。

空港南側でトラック五台分の古タイヤ炎上。山林に燃え移り、もうもうたる火災と黒煙。百本以上のタイマツが夜空を焦がす。大音響と共に花火を打ち上げ。

8・26～27 第三回三里塚を闘う青年先鋒隊・全国活動者会議。

8・30 箱根レーダー基地にゲリラ攻撃。

9・4 警視庁深川射撃場。千葉警察学校射撃場に放火。

9・12 ジェット燃料輸送の成田線踏切がコンクリで埋められる。

9・16 空港南側での飛行阻止行動。反対同盟を先頭に千人がタイマツデモ。花火・風船の束・照明弾で飛行阻止行動。

荒海のアウターマーカーに火炎瓶攻撃。空港周辺でゲリラ行動。

9・17 強行開港粉砕・百日間闘争貫徹・二期工事実力阻止全国総決起集会。三里塚第一公園に一万八千人。アドバルーンで南側飛行を終日阻止。

11・1 千代田学区加茂部落で三・二六記録映画上映会

11・19 全国三里塚救援連絡会結成集会

12・8 午前三時四十分頃、成田市駒井野の東京空港交通成田車庫のリムジンバスが突如炎上。

12・15 午前二時十分頃、京成成田空港駅前の空港内機動隊宿舎に火炎瓶、炎上。十本。付近の監視塔へも火炎瓶数

12・18 東京・大阪・千葉・広島・福岡等全国六ヶ所の警察や成田空港関連施設に攻撃。

一九七九年

2・6 午前二時二四分、トラックに乗り込んだ先鋒隊、第五ゲートを急襲。火炎瓶で警備ボックス炎上。

2・7 先鋒隊、午後六時五五分、第二ゲートへ火炎乗用車。午後八時、岩山にアドバルーン。

2・25 反対同盟が横堀要塞の奪還行動。

3・10 反対同盟先頭にタイマツデモ・飛行阻止行動。岩山でアドバルーン、照明弾、タイヤのバリケードに火。番神三叉路のタイヤのバリケードにも火。

一九七九年九月七日の「九・七空港突入」を報じる「統一」

南側の発着ストップ。鉄塔破壊道路に火炎瓶投擲。

3・25 現地総決起集会に一万七千人

5・20 朝倉での現地集会に八千人。洋ダコ、アドバルーン、風船で飛行を一日阻止。午後八時半、空港北側の花火で北側発着も度々中断。

午後八時二四分、先鋒隊が桜台の新町道手前の機動隊を攻撃。火炎車炎上と同時に鉄パイプ・火炎瓶で武装した部隊がトラックを飛び降り攻撃。

総括集会を監視していた新潟県警ヘリコプターがアドバルーンの紐にひっかかり不時着。

6・23 滑走路南端にアドバルーン。

6・25 南北両端で花火と照明弾。

7・24 木の根風車完工。

9・7 先鋒隊突撃小隊四名が空港内に突入。午前七時二分、厳戒体制の虚を突いてトラックで空港内に突入。第九ゲートなど三つのゲートを突破して誘導路まで突入。七基の誘導灯を破壊。トラックを炎上させ、先鋒隊旗が翻る。空港は午前七時から三十分全面閉鎖。

9・16 全国総決起集会。夜、タイマツデモ。南北両端で飛行阻止行動。アドバルーン、花火、照明弾で南側は午後四時以降、北側も三十分間飛行停止。

10・21 午前十時半、三里塚第一公園で一八〇〇人が集会。飛行阻止行動へ。

午後二時、花火打上。産土山道など五箇所でタイヤの山に火。大袋・農道突端から滑走路に照明弾。七個のアドバルーン、一六の洋ダコで南側の飛行阻止。

午後三時四〇分、先鋒隊、第七監視塔の機動隊に火炎瓶攻撃。

午後六時一五分、トラックに乗車した先鋒隊部隊が空港第三ゲートへ火炎瓶攻撃。

午後六時四五分、タイマツデモの途中、三角バリの鎖を切り、鉄塔破壊道路上に進出。ガード下マン詰所等を炎上させ、鉄パイプ・火炎瓶で機動隊前線指揮所を攻撃。

十余三の会場では正午から全国総決起集会。

11・7 成田市小菅からアドバルーン上がる。

11・11 戸村一作反対同盟委員長追悼集会、三里塚第一公園。

11・13 アドバルーンで飛行阻止行動。

11・23 岩山小跡地で六〇〇人が結集し飛行阻止集会。気球、古タイヤ炎上、アドバルーン、花火で南北の飛行阻止。

12・15 空港北側・大山の成田新幹線工事現場の四台の工事車両炎上。

12・16 全国総決起集会、三里塚第一公園。デモ後、岩山にアドバルーン。タイマツデモへ。

午後六時五五分、桜台の機動隊前線指揮所前の警備線に二方向から火炎瓶で攻撃。

午後七時五五分、空港北側・野毛平工業団地付近の機動隊警備線に攻撃敢行。車両を炎上させる。

（「統一」再刊準備版一〇五号（一九七八年四月一日）の年表など「統一」報道から再構成。用語・表現などは当時のもの。参加者数は主催者発表）

資料

日本人民にとっての三里塚決戦の歴史的意味

白川真澄

I はじめに

三里塚決戦が今日、「鉄塔の破壊か防衛か」をめぐる鉄塔決戦をその最初の局面として「開港か廃港か」を直接に決する文字どうりの決戦段階―三里塚決戦―に入りこんでいる。このことは、三里塚に共感し、連帯する全ての人々によって承認されている。

しかし、三里塚決戦が、ひとり三里塚闘争にとっての天王山をなす決戦であるのみならず、今日の日本階級総体にとっての決戦という意味を持つ闘争であるということ。すなわち日本人民のあらゆる先進的闘いがその持てるすべての力と蓄積を投入し、共同の力で集中し闘いぬくだけの意義と価値をもつ闘争であるということについては、すべての人々の意見が必ずしも一致しているわけではない。

我々は、「決戦」を年がら年中叫びたて、毎月「決戦」をやっている（やったような気になっている）様な人々とは正反対に、〈決戦〉という規定をきわめて慎重かつ厳密に用いるように自戒してきた。しかし我々は、今日の三里塚決戦こそは日本階級闘争によってその将来を左右する決戦としての意味をもち、近くは六九年秋期政治決戦いらい日本の先進的人民が久々に際会する歴史的決戦たりうる闘争であると主張する。

【三里塚決戦はそれ自体としては、敵の年度内開港策動を粉砕し、廃港へ追いこむことを直接の目標とする闘争である。しかも、この目標を主として敵自身の開港準備作業のつまづきや内部対立に依拠してではなく、主として巨万の人民が実力で空港を包囲し、さらに空港突入・占拠を実現することによって実現する。つまり「開港すればいかなる不測の事態が生まれるかわからない」「空港を人民の攻撃から守り『安全』に機能させることは不可能である」ことを敵に実際に思い知らせる大実力闘争の爆発によって実現する闘争である。

階級闘争総体にとっての〈決戦〉とは、階級的政治的力関係の全体的な転換を規定する（今日では、人民の政治的総反攻と新しい全人民的政治高揚への突破口をつくりだす）闘争となり一時代にわたる人民の闘争力と闘争経験の全蓄積を投入し検証する場となり、人民の闘争力の普遍的・全体的結合を形成し単一の人民主体を具体的に登場させる飛躍点となる闘争であると一般的に規定しておこう。】

ところで、我々のこうした立場に対しては、当然にも多くの批判や疑問がよせられている。

いわく、〝すべての力を三里塚決戦の勝利へ〟という路線は、――日帝の全面的な攻撃に対する全戦線の反撃という点で――狭すぎるのではないか」「それは、日韓連帯・狭山・反原発さらに職場闘争・不況下の労働争議など重要な諸闘争を包摂する戦略的展望を欠いている」「三里塚と自分の持ち場・職場の闘いとの結合を無視した現地動員第一主義に陥っている」「日本の階級攻防ははたして三里塚を主軸に〈決戦〉を迎えるまで煮つまっているのか」「それとも六九年秋期決戦でいわれたのと同じ『強いられた決戦』なのか」「〝すべての力を三里塚決戦の勝利へ〟集中するのではなく、すべての戦線で〝第一・第二の三里塚を〟創り出すことがもとめられているのではないか」。

こうした批判と主張は、たしかに無視することができない根拠を持っている。われわれは「三里塚決戦は何故、またどのような道程と展望によって革命アジアと結合する日本革命の勝利への決定的な跳躍点たりうるのか」という革命路線的展望の深化と豊富化へむけて、これらの批判的立場とその一契機として止揚する努力を急がなければならない。

にもかかわらず、これらの批判や疑問には、三里塚決戦の意義をとらえる上での大きな消極性がひそんでいると私には感じられる。それは、三里塚決戦をたんに三里塚闘争にとっての決戦段階とみなす、ないしは（最前線に位置するがあくまでも）一つの個別的な戦線・拠点における天王山的闘いとみなす消極性である。あるいは、三里塚決戦が、日本人民が共同して単一の実力闘争を集中して闘いぬくことによって単一の人民主体を形成することのできる好機たりうる――十年・十数年に一度あるかないかの歴史的好機として積極的・能動的に活かす――巨大な可能性を見過ごす消極性である。

本稿は上に列挙したような批判と疑問に直接答えるものではないが、三里塚決戦がどのような意味・性格・内容・可能性において今日の日本階級闘争にとっての〈決戦〉としての意義を持つかに関する問題提起である。

日本人民にとっての三里塚決戦の意味をどのようにとらえるかをめぐる大衆的な路線論争こそ、三里塚決戦により広範な人民とより大きな活力を動員するテコとなりひいては革命路線を創造的に獲得する作業のバネとなるだろうからである。

Ⅱ 三里塚決戦の意義の〝消極的〟規定と〝積極的〟規定

三里塚闘争が一つの個別闘争・拠点闘争でありながら、日本人民のすべての闘争にとって普遍的・中心的な意義を持つのは何故か。今日の三里塚決戦がひとり三里塚十二年の闘いにとっての天王山であるのみならず、日本階級闘争の命運をも左右する決戦であるのは何故か。

この問いに対して、通例いわれる答えは次のようなものである。それは、三里塚が日本帝国主義と福田政権の戦略的攻撃――〈外〉に向っての大がかりな南朝鮮・アジアへの侵略・「開発」とそれに照応する国内での大型「開発」不況下の産業再編成の強行的推進、対決点なき「保・革連合」路線への人民戦線派勢力の包摂と人民の自立した諸闘争に対する強権的圧殺の最前線に立たされ、敵の攻撃が三里塚に集中しているからである。したがってまた三里塚が〈そこにもっとも戦闘力がある主体が存在していることもあって〉支配階級と人民との政治攻防の最大の焦点へせり上がってきているからであると。

これはそれ自体としては正しい。三里塚決戦が日本階級闘争総体にとっての決戦であるという全階級的・普遍的意義とその根拠が三里塚決戦が現時点の敵・味方の政治的攻防関係全体の中に置かれている。こうした最前線的・焦点的な――客観的な――位置から規定されることもたしかである。

だがしかし、こうしたとらえ方は、私にいぜんとして三里塚決戦の全階級的・普遍的意義の〝消極的な〟規定性にとどまっていると思われる。

何故、〝消極的な〟のか。三里塚においてこそ今日の日本階級闘争の決戦を能動的に組織することができる積極的な根拠が十分に語られていないからである。

次のような反論を想定してみよう。「階級攻防の最大の焦点は、今日はたしかに三里塚であろう。しかし明日には焦点は別の戦線と課題に移るかもしれない。すぐ近い将来には、もっと別の闘争課題に移るかもしれない……」と。

階級攻防の最前線と焦点がどこにあるかという観点からみれば、この規定は決して否定することのできない、十分な根拠を持った規定であろう。この想定にしたがって事態が進行し階級攻防の焦点が別のもへ移行するならば、日本階級闘争にとっての決戦は、三里塚決戦ではなく、別の課題と戦線での決戦にもとめられることになってしまうだろう。

私は、三里壕闘争の最前線的役割を承認しこれに連帯する多くの戦線の活動家たちの中にも「今日では三里塚が、しかし近い将来には自分の戦線や職場の闘争が階級攻防の焦点にせり上るかも知れないその日まで自分の持ち場で力を貯えることが中心である、自分の持ち場でのこれまでの闘いのあり方を変えずに三里塚決戦に力を貸せばよい。何も三里塚だけを全体の決戦として闘う必要性はない」という発想が根強く存在しているように感じる。

三里塚決戦の全階級的・普遍的意義を、それが現時点の階級攻防の最大の焦点であるからという側面から主として根拠づける立場。すなわち階級攻防の焦点にせりあがっている三里塚決戦が日本人民全体の共同の決戦として闘いぬくにふさわしい最大の可能性と条件をその内部にもっているという〝積極的・能動的な〟根拠を提示できない立場は、こうした発想を根底から打ち破り止揚することに成功しないといえる。

三里塚が敵の戦略的攻撃の最前線に立たされ、現在の政治攻防の最大の焦点になっているという事実をそのまま根拠にして三里塚決戦の全階級的・普遍的意義をとらえる観点を、人民の諸闘争相互の関係として要約すれば、次のようになる。

「三里塚が敗れば、すべての戦線で敗けるだろう。その意味で三里塚闘争は階級闘争の天王山である」（八・二〇～二一「三里塚と全国を結ぶ活動者会議」での発言）。しかし、この会議は、意外にそれぞれの戦場に還元される時に「たとえ三里塚が敗けても自分の戦線では自分たちがいる限り敗けることはないだろう」というホンネに吸いとられてしまっているのではないだろうか。

この「三里塚で敗ければすべての戦線で敗ける」という命題が間違っているというのではない。しかし、問題は一つの戦線や拠点の闘争の勝ち負けが他の領域の闘争の力関係や勝ち負けにストレートに・一挙運動的に伝播することを遮断するような現代日本の特殊な支配構造が厳として存在してるということである。正確にいえば、それぞれの戦線の先進的活動家が他の戦線・領域の闘いに対して距離をおき、無関心な態度をとり、自分の持ち場での闘いの個別的力関係を一切の判断に優先させる傾向を、許容し促進しているような支配構造が作用しているということである。

したがって、問われているのは人民の利害と闘争を（何よりもアジア・「第三世界」の人民との分断を土台にして）相互に遮断し分断し細分している現代日本の支配構造とそれに規定されている人民の闘争の「利己」的なあり方そのものを、どこからどのように変革していくかということである。

実はこの点にこそ、三里塚決戦が日本階級闘争総体にとっての決戦となり、日本人民のあらゆる闘争がほかならぬ三里塚に決戦の場を共同で求めるという〝積極的――能動的な〟意義と根拠がある。

それは、三里塚決戦が人民の闘争のこれまでの支配的なあり方、闘争を支える価値観と原理、諸闘争のお互いの結びつき方を変革する共同の実践的な場であり、またそうした場たりうる最大め可能性をもっているということである。すなわち、三里塚決戦は自らの闘いの自立的で戦闘的な発展を試みてきた個別の諸闘争が、その個別性の枠内に閉じこもるかぎり不断に発生させる内部の「腐敗」・足踏みの傾向と闘い、自己変革する普遍的な――しかもきわめて具体性をもつ――契機なのである。

あるいはまた、次のようにもいえる。三里塚決戦は、人民の諸闘争がいかに戦闘的であっても〈部分化〉されることによって身につけざるをえない〈私（わたくし）〉をはぎとり、真に〈共同的〉な相互の結合関係を創出する闘いである。人民全体の闘争の力量と経験を普遍的な形態で結合し、蓄積できるもっとも具体的な場である。経験を先取りすれば、三里塚決戦は、日本人民にとっての固有の〈革命の根拠地〉を創造する闘いであり、日本の先進的人民が一つの人民に自己形成する具体的な環である。

それでは、三里塚決戦はこの可能性をどのようにはらんでいるのだろうか。

Ⅲ 〝反戦・全共闘〟派から〝三里塚〟派へ――六九年秋期決戦と三里塚決戦（その1）

日本の先進的人民が〈一つの人民〉になる、つまり単一の階級主体として登場するという問題から考えてみたい。

日本人民が〈一つの人民〉になるということは、人民が〈何ものであるのか〉〈何になろうとするのか〉ということを具体的な闘争とその主体として表現しきることである。すなわち、自らが〈何ものであるのか〉という根本的解放の目標についての階級的政治的立場と、〈何になろうとするのか〉という〈根本的解放の目標についての普遍的な基準――あらゆる個別的な諸闘争をつらぬきその担い手たちがそこに帰属することのできる公準――を具体的に獲得するということである

たとえば「平和と民主主義」をめざす「革新勢力」とは、擬似的なものであったとはいえ、日本人民が〈一つの人民〉として登場した姿であり、五〇年代におけるすべての闘争主体がそこに帰属した普遍的基準であった。

そのピークをなす「安保・三池闘争において人びとは容易に自分が何であるかを定義できた……。国会デモと三池を指して自分が『あっち側』だと言いさえすればそのとき人びとは自分の政治的立場を、いや自分の『何者性（アイデンティティ）』を十分的確にあらわしているのであった。……この大闘争との関連で自分を定義できたということは、逆にいうならこの闘争が個々人に定義の基準を与えることができるほどの普遍性をわずかの間であれ、体現したということでもある。」（武藤一羊、『展望』七七年一月号）

しかし、この「平和と民主主義」をめざす「革新勢力」という公準が擬似的（とくに一国主義的）なものであった根本的限界は、その基準がその後の「高度経済成長」とアジアへの侵略・「開発」の過程に対抗できず、むしろそこへ見事に解体・包摂されていった経過によって明々白々となった。

六九年秋期安保政治決戦を頂点とする六〇年代後半の階級闘争の中で、日本の先進的人民は〈一つの人民〉になるという具体的姿、つまり自分が〈何ものであるのか〉〈何になろうとするのか〉を表現する普遍的基準を新たなに生み出した。〝反戦・全共闘〟派がそれである。

「自分は反戦・全共闘派である」――人々はそう名乗ることによって、どこにいようとも自分の階級的政治的立場を全国政治・世界史との関連で鮮明に表現することができた。人々はそこに帰属することによって、職場・階層・戦線の違いをこえてまだ見も知らぬ人々と一つに結ばれている自分を実感し、体現することができたのである。

〝反戦・全共闘〟派という自己表現と公準は、今からとらえかえせば――きわめて少数派の人民のそれにとどまっていたことを別にしても――たしかにまだ抽象的であった。しかし、そこには少なくとも三つの本質的な内容と指標がふくまれていたのである。

その第一は、この主体と闘争が〝世界史的な同時代性〟をもっているということであった。〝反戦・全共闘〟派は、ベトナム革命と連帯することによって、自分たちが全世界で闘う人民―アジア・「第三世界」民衆の武装解放闘争、フランス「五月革命」のバリケードで闘う労働者・学生、アメリカの黒人反乱、中国の「プロレタリア文化大革命」――と直接に結ばれており、国境を越えて同じ戦列にいることを表現していた。

その第二は、自分たちが〝実力闘争〟の担い手であるということであった。〝反戦・全共闘〟派は議会・交渉と取引き・多数決民主々義に依拠せず、あくまでも自らの実力・暴力に立脚して闘うとして登場した。そのことは「受益者」たることを拒否し、犠牲を恐れず、あくまで自らの実力に直接依拠して自らの権力を創り出す――〝人民自身の権力を〟めざすという階級的立場と目標を表現していたのである。

その第三は、これまでのブルジョア社会の日常的な秩序・規範・価値観に対する基本的な反逆と破壊を高らかに宣言したことである。特に全共闘運動は、この点において強烈な全社会的衝撃力を与えたが、〝反戦派〟の労働者も自分の労働のあり方やこれまでの生き方に対する根本的な批判に着手しはじめていた。

〝反戦・全共闘〟派は、新しく創造されるべき文化――したがって社会編成のあり方を積極的に提示するまでに至らなかったが、ブルジョア社会の支配的原理総体を否定する〝文化革命〟の最初の担い手として登場したのである。

〝反戦・全共闘〟派という表現と基準がふくんでいた闘争の世界史的同時性、実力闘争、ブルジョア社会の価値観と原理を根本否定する文化革命という指標は、ある闘争が〈一つの人民〉を具体的に登場させるものであるかどうかしたがってまたその闘争が歴史的な〈決戦〉たりうるかどうかを示すバロメーターであるといえる。

人民はそこに帰属することによって、自分が〈何ものであるのか〉〈何になろうとするのか〉を表現できた〝反戦・全共闘〟派も、その抽象性の故にしだいに風化し、個別分散し〈部分化〉する経過をたどってきた。

八・二〇～二一の「三里塚と全国を結ぶ活動者会議」の席上で、全国一般南部支部の渡辺勉氏は、「三里塚を語ればすべての闘争を

表現できるような時代へ入りつつある」と提起した。さまざまの闘争や個別闘争の諸主体が自らを〈三里塚〉派と表現することによって、〈一つの人民〉としての普遍的基準を具体的に提示できる新たな可能性が生まれていると、いいかえることができよう。

このことは、たしかにまだ可能性にすぎないかもしれない。人民の諸闘争は、いまだに自己の共通の階級的政治的立場と目標を具体的に――具体的にというのはたとえば反日帝とか反福田政府とかではなく、自らが創出すべき社会の新しい関係性と原理を積極的に示すということである――表現するために数多くの指標を用いざるをえない。「日韓連帯」派、「狭山」派、「反原発」派、「反差別」派、「反JC」派……。日本の先進的人民は、こうした多元的な指標と表現を組合わせないと一つの普遍的なことがらを、自分たちが〈何ものであるのか〉〈何になろうとしているのか〉を具体的に表現できないというのが、現状である。

われわれは、この数年間、すべてを包含できるような一つの具体的な政治表現の喪失に悩んできた。しかし、三里塚闘争は、さまざまの領域と戦線で自立した闘争を展開している人民が、自らを〈三里塚〉派に帰属させることによってその普遍的な階級的立場と自らのめざすものを明確に表現できる。もっとも豊かな可能性をそなえているのである。

三里塚決戦は、六九年終期政治決戦の担い手、〝反戦・全共闘〟派がそなえていた先述した諸指標を、より発展した内容においてもっている。

第一に、三里塚闘争がもっている世界史的同時代性。それはかつても「三里塚の地下壕はベトナムの塹壕に通じている」という高い思想水準で表現されてきた。今日の三里塚決戦は、ヨーロッパ・アメリカで巨大な民衆運動のうねりとして燃え上がる反原発運動、日帝の侵略・「開発」路線に抗するアジア人民の土地・海の取上げを阻み、独裁政権に抗する闘いとの世界史的同時代性をもって闘われている。

自然と人間の力能の極限的な破壊と浪費をほしいままにする腐朽したブルジョア文明の極北であり帝国主義の世界戦略の再編の武器たるエネルギー・食糧戦略と核戦略の結節点である原発。この原発を阻止するヨーロッパ民衆の闘いは、原発予定地を実力で占拠しそこに人民自身の新しい生活と文化を創造しようとする闘い（たとえば「ウィールの森の人民大学」）にみられるように、農業の収奪と破壊の上に立つ〈工業化万能〉の「近代化」文明の拒否、自然と人間との根源的な有機的統一の再生工業と農業との新しい連帯の形成などの根本的テーマをめぐる闘いとなっている。

人間・自然・社会・文明のあり方を根本的に問うというこの同じ人類史的テーマに、ベトナム革命の勝利をわがものとしフランス「五月革命」を継承する人々と肩を並べて、三里塚闘争が挑戦していることは明らかである。

第二に、三里塚をきわだたせるその本性は実力闘争にあることは多言を要しない。しかも三里塚の実力闘争は、〈生産の道具を戦闘の武器に変える〉という創造的な内容と尽きることのない源泉をもっている。それは（拠点での防衛的闘争という限定をもつにせよ）、〝生産・生活・闘争の一体化〟という人民の政治にふさわしい――ブルジョア政治が人民の生産・生活の基盤から切断され疎外された抽象的な政治であるのに対して――強さと特質を示しているのである。

第三に、三里塚闘争は、ブルジョア社会の支配的な価値観・原理・規範を根本から拒否し、新しい文化と社会のあり方を創造する文化革命の先駆けである。三里塚闘争が育てたもっとも積極的なものは、腐朽しきった戦後日本のブルジョア社会にとって代わる新しい社会――人間と人間との、人間と自然との結びつき方、生産と文化のあり方、人間の生き方と新しい力能――を形成する原理と基準のいくつかを闘いの中で創造してきたということであろう。

Ⅳ 新しい社会編成の原理を共同で獲得する闘い――六九年終期政治決戦と三里塚決戦（その2）

実はこの点に、七七年三里塚決戦が六九年終期政治決戦をどのような内容において越え出ることができるのかという問題の核心がある。

すなわち、三里塚決戦は、まさに三里塚十二年の歴史が育て上げてきた新しい社会編成の原理と基地を日本人民が共同で獲得していくための闘いであること、これである。〈革命アジアと結ぶ社会主義・日本〉をめざす人民の綱領とこれを実現するにふさわしい力と団結をそなえた主体を具体的に獲得し登場させる場なのである。

六九年終期政治決戦が闘いとったもっとも主要な結論は〝日本人民の根本的解放は、アジア・『第三世界』の解放革命との合流、とりわけ朝鮮人民の統一解放革命との連帯においてのみ実現できる〟という根本的立場であった。そして七五年ベトナム革命の勝利は、アジア民衆の革命闘争と結合するという根本的課題をいっそう具体的な次元で問うこととなった。すなわち〝アジア民衆と真に連帯することのできる日本人民の主体とは、いかなる目標・価値観・力・結合をそなえた人民なのか〟〝そのような主体はどこからどのようにして形成されるのか〟と。

この闘いに対して、日本人民がさしあたってだすことができるもっとも明確な答は、三里塚――三里塚のような闘いと主体、三里塚を共有して闘うことのできる人民の結合ということである。

八・二〇～二一会議で、円谷真護氏は日韓連帯の闘いに関して次のような的確な指摘を行った。

韓国民衆の闘いは、朴独裁政権が日本の「近代化」百年をモデルに強行しつつある〝GNP第一〟〝工業化万歳〟の価値観に対する闘いとなっている。「第三世界」との連帯、日

本人民の歴史的な自己批判を柱とする日韓連帯の闘いは侵略を必然的に伴った日本の「近代化」「工業化」路線とこれにどっぷり浸ってきた日本人民に対する我々自身の根本的な批判と自己批判をもとめている。その最初の具体的な闘いとして三里塚がある……と。

三里塚闘争は、持続的な生産手段であり生産力でもある土地〈土〉としての土地〉をゼニ・商品に換算することを拒み、農業と農民の収奪と切り捨ての上に成り立つ〈工業化〉〈開発〉の前に立ちはだかってきた。〝ゼニの論理〟を拒否し、農業の収奪の上に成り立つ〈工業化〉の論理と真向から対立した三里塚はブルジョア社会の支配原理そのものを具体的な姿で告発してきているといえる。

何故なら、ブルジョア社会を編成する原理は、人間のあらゆる欲求・力能・つながりを利潤の論理、商品貨幣関係に解消するような、社会的および人間―自然の諸関係の〝物象的転倒〟にあり、また工業―農業、都市―農村の〈世界大化した〉敵対的な分業関係――これを基礎とする極限化した階層的な分業システム――あるからである。

そして、三里塚闘争の積極性はこうしたブルジョア社会の支配的原理と基準にとって代わる、人民の側からするまったく新しい社会形成の基準を、その内的な〈格闘〉をとうして芽生えさせてきたことにある。この点については、すでに別の機会に論じた（『統一』七七年二・五号）こともあるので簡単にのべておこう。

たとえば、〝ゼニの論理〟、日本社会で支配的な〝儲かる、儲からない〟という社会的生産の基準（何のために、誰のために生産するのか）にとって代わる、〝人民にとって真に必要なもの――何が必要であるかも人民自身が自覚的・共同的に決定する――を生産する〟という新しい基準が、農業を営みつづける積極的確信の中に育っている。

あるいは故大木よねの「おらのみはおらのものであってもうおらのものでねえ」という言葉に代表される人々の新しいつながり方、すなわち、お互いに対して無関心で排他的な関係しかとらない「私的な」諸個人がその社会的つながり「物象」として自分たちの外に独立させるのに対して、社会的つながりを自分自身の内に自覚的・共同的に確保する「自由な社会化された個人」という新しい結合関係の原理が、闘う仲間同士の透きとおった信頼関係の中に芽生えている。

しかも、こうした新しい社会編成の原理が、たんなる思想や理念の断片としてあるだけでなく、闘う人々の結びつきと団結の規範、闘う人民内部の新しい秩序として具体的な姿で生成していることが大切なのである。

たとえば、都市の多くの労働者・市民・知識人が三里塚の地を訪れ、「進んだ」農民から農業を教わり、闘いと生き方を学び、利潤のために自然と人間の力能を破壊しつくす工業生産のあり方を反省するという連帯関係がある。この「人民的交通関係」は、農業の収奪の上に立つ〈工業化〉「進んだ」都市と〈おくれた〉農村というブルジョア的な分業関係をくつがえす、工業と農業、都市と農村が〈相互に奉仕し相互に学びあう〉という新しい関係の可能性を表明するものである。

大木よねが「どうそうがいちばんたのしかった」と語った。闘いの中で生成する人民の新しい内部秩序とはどういうものだろうか。加瀬勉氏が「よねさんは、生涯で三度の強制代執行された」と見事にとらえたように、親を奪われ文字を奪われ自活できる土地をもたなかったよねさんは、おそらく三里塚で闘争が始まるまで、一人前の対等な人格として扱われなかったに違いない。そのよねさんが対等な人格として、いやもっとも先進的な人間として評価されるようになった――そこには「学歴」や「財産」で人間を一面的に評価し差別的に秩序づけるブルジョア的社会秩序を否定した。人間の力能と人格性を評価する新しい基準と規範が獲得されているのである。

もちろん、三里塚闘争が創造してきたこうした諸要素については、いくつかの限定が必要であろう。三里塚の中で芽生えてきた新しい価値観・原理・規範は、けっして「純粋な」姿で抽出できるものではない。それは、この新しい芽をたえず風化させる。同じ農民主体や農民と人民との連帯関係をとらえているブルジョア的な価値観・発想とのきびしい〈格闘〉の中にだけ実在しているのである。

あるいは、三里塚闘争は新しい社会編成の原理、《革命アジアと結ぶ社会主義・日本》をめざす綱領と主体の獲得にとって必要なすべての要素を、ことごとくその内にはらんでいるとはいえない。

にもかかわらず、三里塚闘争はその内部的〈格闘〉をとうして、人民が新しい社会を形成する原理と主体的力量のもっとも重要ないくつかのものをもっとも具体的に、もっとも先進的に創出していることに何の疑いもない。三里塚闘争は、日本人民のあらゆる闘争がこの社会全体とどれほどラディカル＝根源的に対決するまでに成熟しているか、どれほどそれに必要な主体的力量を培ってきているかを測定する具体的普遍的基準となってきているのである。

このように三里塚は、日本人民にとって〈一つの人民〉となる結節点として活用できる巨大な可能性そのものである。かつて〝反戦・全共闘〟派は、何万・何十万という人民が砂川・羽田・佐世保・新宿・東大・日大……と全国を共同して転戦しぬいた経験と過程の数年間の上に始めて形成された。とすれば同じように、日本の先進的人民が〈三里塚〉派としての新しい普遍的基準において自己を形成し表現できるようになるためには、共に血と汗を流し犠牲を共に引きうけて三里塚決戦を同じ戦場で闘いぬく共同的実践の蓄積が必ず必要なのである。つまり、〝すべての力を三里塚決戦の勝利へ〟集中する共同の闘いの蓄積が必要なのである。

Ⅴ「第二・第三の三里塚を」と「すべての力を三里塚決戦の勝利へ」

それでは、日本の先進的人民が〈三里塚〉

派という具体的な基準において自己の階級的立場と目標を表現するのは、どのような道程において可能なのか。三里塚闘争が育んできた普遍性（新しい社会形成の原理と基準、主体の団結の規範と力能）を共有する単一の人民主体として自己形成できるのは、三里塚決戦をどのようにして共同で闘いぬくことによってなのか。すなわち、三里塚決戦を共同で闘いぬく上で、人民の諸闘争・諸闘争力の間にどのような結合関係をつくることが必要なのかという問題である。

〝全国いたるところに第二・第三の三里塚を〟――これが三里塚闘争と人民の諸闘争との結合・連帯関係を表現する中心的スローガンとなってきたといえる。

〈第二・第三の三里塚を〉というスローガンは、三里塚闘争の普遍性をすべての人民が共有する、しかもそれぞれの生産と生活の場に即してこの社会編成の普遍的原理と人民の内部秩序の規範を固有の姿で表現する力を獲得していく過程を指示するものである。

【この過程は人民が三里塚闘争の普遍性を共有＝共同実現するうえで、「対アジア関係から日本社会内部の諸関係のすべてがことごとく変革される。その新しい政治的・社会的諸関連の総体を自覚的・先取り的に獲得＝表現していく過程」（『統一』一七七年二月五日号）と相互規定的である。】

同時に、〈第二・第三の三里塚を〉は、三里塚闘争それ自体と人民の諸闘争との結合・連帯関係を戦略的・運動論的に――人民の闘争力と隊列をどのように配置するのか――表現する路線でもある。

この意味で〈第二・第三の三里塚〉の路線は、すべての戦線で三里塚のような水準と内容をもつ闘争を数多くつくりだし、敵をいたるところに誘い出し、釘づけにし、敵の力を分散させることによって敵を大きく逆包囲するという戦略構想である。

いいかえれば、人民がすべての戦線で力を貯えながら、いたるところで戦端を開き、実力闘争を噴出させ、敵の強大な力を分散させて、敵の攻撃が三里塚に集中できないよう力関係をつくり出すことによって、三里塚闘争を勝利に導くという戦略路線である。

この戦略的構想は、そのスケールの大きさとダイナミクスにおいてたしかに魅力的である。しかしこの〈第二・第三の三里塚を〉の戦略路線は、現瞬間において全人民が共同して三里塚決戦を闘いぬき勝利する路線として正しいだろうか。

我々は、まずに第一に、三里塚闘争の発展のいくつかの段階の変化を厳密に区別しなければならない。結論的にいえば、三里塚決戦に突入する以前の段階で、三里塚決戦を準備する戦略構想として正しかった〈第二・第三の三里塚〉の路線は、決戦そのものに入っている現段階はそのまま通用できない。重点は、〝すべての力を三里塚決戦の勝利へ〟集中する戦略の布陣の構築に移されるべきだ。

三里塚決戦の段階では、相対的弱少な人民の闘争力を集中し密集した力で敵を圧倒すべきであって、いたずらに人民の限られた力を分散すべきではない。〈すべての力を三里塚決戦〉へ全力集中し三里塚現地の攻防水準を飛躍的にせり上げ持久戦化することによって、新しい「援軍」を獲得することができる。すなわち、三里塚現地闘争の活力・創意性・水準のせり上げによって、より新しい層の人民の関心と共鳴をよびおこし現地闘争の「実例の力」によって人民の政治的エネルギーをよびさまし、動員することができるのである。日本人民の歴史的大闘争のいくたの経験は、この法則性を教えている。

人民の闘争力の〝集中と分散〟との正確な区別と結合という準則は、三里塚決戦のそれぞれの局面の推移においても、現地闘争へ全勢力を集中する闘いと全国へ還流・散開して新しい力を担う運動とを巧みに組み合わせる戦術においても貫かれなければならない。

しかし、大局的にみて、三里塚決戦の段階は、人民の諸闘争の〝すべての力を三里塚決戦へ〟集中することに、重点がおかれる戦略的段階である。

第二に、この〝第二・第三に三里塚を〟の戦略路線を、日帝国家権力を打倒し人民の権力を樹立する革命闘争の長期的な路線・構想としてとらえかえしてみよう。それは、明らかに〝総蜂起〟型の構想――総蜂起を準備する戦略につらなる。すなわち、すべての戦線でそれぞれの闘争主体が力を貯えながら、一つの「好機」をとらえていっせいに総決起し（あるいは単一の戦闘力へ集中し）、敵を包囲・打倒するという構想であるといえよう。

しかし、この戦略構想は、次の核心的問題を欠落させる場合には、永遠の待機主義に転落せざるをえない。その核心的問題とは、自らの力と隊列を全戦線へ散開させて配置しつつ、好機をとらえていっせいに起上がることができる（また集中することができる）ような単一の主体（党と人民）を、どこからどのようにして創り出していくのかという問題である。

残念ながら、〈第二・第三の三里塚を〉の路線、ひいては〝総蜂起〟型の戦略構想は、日本人民の革命主体形成上の最大の難問であるこの問いに明確に答えていない。

日本人民の闘争主体のあり方を直視すれば、それぞれの戦線で力を蓄積しつつ好機をとらえていっせいに総決起するという見通しはすべての戦線で〝別個に起って共に・同時に撃つ〟のではなく、好機が到来しても〝別個に起って勝手バラバラに撃つ〟という惨めな結果になる危険性の方が大きい。人民の諸闘争が個別的な分野と領域の枠内に分断され、閉じこめられ、お互いの闘争に対して無関心で排他的になっている現状を変えないかぎり、「何が好機か」をめぐってもそれぞれの戦線の力関係の判断を優先させる中で決定的な食い違いが生まれることは見やすいことである。

【この点で、六九年終期政治決戦における「職場反戦派」とよばれた主体を総括するとき、われわれは、労働者階級の多くの部隊と全国の職場へ散開・配置されて六九年秋の時点にその先頭でいっせいに決起した職場反戦派、結果において個別の職場の力関係や特殊性にひきずられてきわめて部分的で不均質な

決起にとどまらざるをえなかった弱さを認めなければならない。

われわれが主動力となってその形成に努力した職場反戦派は、単一の共同闘争のいくつかの経験をくぐって、それなりに政治的均質性・全国政治の焦点・「孤立を恐れず連帯をもとめる」感性を培ってきた。にもかかわらず、職場反戦派はこうした単一の政治主体としての資質と経験を共有し蓄積する点で未熟であり、立ちおくれたのである。

〝反戦派〟の解体と同化が進行したここ七～八年の過程は、さまざまの闘争主体が単一の共同闘争の経験を蓄積し、均質性と共同性をみがき上げることがいっそう困難になった時期であり、その結果として現存しているのは、主として個別闘争の枠内で育ってきた特徴を色濃く身につけた主体であることはいうまでもない。】

私は、人民の革命主体形成途上の――したがって革命路線上の――中心的課題の一つは、個別の戦闘的な諸闘争のその主体が身につけている〈私（わたくし）〉をどのように止揚できるかという点にあると思う。

〈すべての力を三里塚決戦の勝利へ〉集中する路線は、三里塚闘争と諸闘争とのこれまでの結合・連帯関係そのものを積極的に変革する路線である。そのことによって、実は個別の領域での闘争の枠内に分断され、閉じこめられて〈私〉性を身につけてしまった人民の主体形成のこれまでのあり方を根本的に転換しようとする路線である。

人民の諸闘争相互のこれまでの結びつき方を変革しようとするかぎり、まず何よりも三里塚と人民の諸闘争とのこれまでの結合関係をこそ、ここで転換することが必要なのである。三里塚決戦を人民の共同の力を全力投入して単一の実力闘争として人民の諸闘争とその担い手の〈私〉性、〈私〉的な相互関係を止揚できる確かな第一歩である。

VI 人民の内部に〝破私立公〟の結合関係を創り出そう

個別闘争とその担い手の〈私〉性は、独自性・固有性としての個別性と同じではない（諸闘争・諸主体の個別性は否定されるべきものではなく、人民の闘争の普遍的・全体的な結合の結び目になるモメントなのである）。〈私〉性とは、それぞれの闘争と主体がお互いに無関心となり、自分の闘争の個別的な利害と力関係を一切に優先させ、他の闘争に対して疎々（よそよそ）しい態度をとる排他性・セクト性を意味する。

この個別闘争の〈私〉性、つまり相互のあいだの無関心と排他性こそ、日本の――総じて帝国主義本国の――階級闘争の根深い病気であり、実は現代ブルジョア社会の腐朽性と深いつながり・相互浸透の関係をもっているように思われる。

現代ブルジョア社会は、体制にとって本来〝異質〟で〝外的〟な対抗的・制約的要因の労働者・人民の要求や闘争力を〈部分化〉することによって自らの体制内に包摂・同化することに、その延命の道を見いだしてきた。それは現代の資本主義が（恐慌や帝国主義間戦争によって）規制の諸関係と構造の全面的な編成替え水から主導的になしとげる喪失したすら「第三世界」に寄生しつつ腐朽する以外にないことを意味している。

現代のブルジョア社会は、人民の諸闘争を〈部分化〉し、相互に分断された排他的な〈私的〉関係におくことによって、いいかえれば労働者・人民の対抗的な力を〝私的所有〟の根本原理に浸し、包摂しつづけることによって、はじめて延命できるのである。

【したがって、現代ブルジョア社会の危機の特質が、既存の支配秩序の全面的・一挙的「崩壊」という形をとるというよりも、「第三世界」の収奪・寄生の上に立つ「腐朽」のとめどもない深まりと全面化という特有の姿をとるかぎり、〝個別の領域での闘争力量の蓄積と主体の形成の過程が体制の『崩壊』的危機を契機にして普遍的結合を遂げるだろう〟などという自然発生的な見通し、人民の諸闘争の普遍的結合の契機を主として体制の「崩壊」的危機にもとめるという今なお支配的な構想は「百年河清を待つ」の幻想にしかすぎないであろう。】

人民のめざす新しい社会、社会主義は、〝自力更生〟に立脚する連合、人民が〝相互に奉仕しあう〟関係、極限化した分業システムにとって代わる〝分担〟のシステム、要するに〈私的所有〉にとって代わる〈共同的所有〉をその本質的な関係性としてふくむのである。とすれば、社会主義をめざす人民はこれを実現するにふさわしい新しい主体的力量、つまり、新しい社会編成の原理を先取りする人民内部の新しい結合のあり方と力をあらかじめわがものとしなければならない。

すなわち、人民の諸闘争が、相互に無関心で排他的であるような〈私〉的な関係を自覚的に打ち破り、〈公（おおやけ）〉的な透きとおった結びつき、真の〈共同的〉関係――「すべての人民がそれをわがものとすることができるが、何びともこれを独占することはできない」（前田俊彦）という〝共同的所有〟の関係――を人民の団結の内的秩序としてうちたてるという課題である。

そして、人民の諸闘争が身に着けている〈私〉性を自覚的にはぎとっていくためには、人民がもっとも豊かな普遍性をはらんでいる闘争を、単一の実力闘争として共同で闘いぬく歴史的経験を蓄積することが必要である。〝主体――助人〟というこれまでの諸闘争相互の関係を変革し、すべての闘争主体が同じ課題・同じ戦場で心を一つにし、犠牲を共にし、共に血を流して闘い、これまで見ず知らずであった人々の中に兄弟としての階級的連帯の感情を生み出せるような闘争を共同して創出することである。

逆説的にいえば、〈第二・第三の三里塚を〉の戦略を実現するためにこそ、〈すべての力を三里塚決戦の勝利へ〉集中することが必要なのである。

普遍的利害のために闘うことのできる政治的均質性と透きとおった「無私」の連帯感情

と〈破私立公〉の結びつきをそなえた単一の人民主体を創造することが必要なのである。

いいかえれば、人民のさまざまな闘いの力・経験・思想が普遍的な姿をとる〝共有財産〟として蓄積される場、したがって、数多くの闘いの中で最高度に発揮された闘争力、もっともすぐれた闘争経験、もっとも豊かな思想性が凝集され共同の経験として蓄積される場としての〈根拠地〉を創造していくことである。

【人民がその全体としての闘争の力量と経験を共有し普遍的な姿で蓄積する形態には、拠点闘争を共同の決戦として闘いぬく以外にいくつかの形態が考えられる。

たとえば、全国的な政府打倒闘争とそれを担う人民の全国的な統一戦線の形成は、そのもっとも重要な形態である。しかしそれが永続性と堅固さと密集力を欠いた政治宣伝・煽動カンパニア――階級的対決点を明示し人民の政治的力量を点検し敵・味方の力関係を測定する闘争――の水準をこえて、人民の闘争力の集中的な発揮と普遍的な結合、最先進の闘争経験と兄弟的な連帯感の共有的蓄積の場たりうるためには、次のことが必要であろう。

すなわち、この闘争とその政治的主体が国と社会の根本的なあり方にふれる課題（たとえば日韓連帯はその第一のもの）をかかげ、新しい社会編成の原理を示す目標と要求を具体的に表現していること、人民の生産と生活の場から既成の秩序を打ちこわし新しい自らの権力と秩序を形成していこうとする実力に支えられていることが、少なくとも必要である。

我々は、現在の時点でこうした水準と内容をもった全国的な政府打倒闘争と全国的な人民の連合をただちに組織するだけの諸条件と力量を獲得するにはいたっていない。三里塚決戦を人民の共同の決戦として闘いぬくことが、こうした諸条件と力量の成熟を促進する今日の環となろう。

我々は、すぐれた個別の闘争や拠点闘争に「福田政府打倒」のスローガンを接木することによって政府打倒闘争（カンパニア）の一翼への転化がなされ、諸闘争の普遍的な結合が可能であるかのように錯覚してはならない。】

日本人民が単一の実力闘争を共同で組織することができる場、〈根拠地〉を創造する闘いを展開できる場として、三里塚闘争はもっともふさわしい諸条件をそなえている。

三里塚決戦が日本の階級攻防関係の中でおかれている最前線的・焦点的な位置、それ以上に三里塚闘争が歴史的決戦たりうる本質的な諸指標をそなえ、社会主義をめざす目標と主体の形成にとって提示している普遍的な諸要素。すでにのべたことを別として我々は最後に次の点を強調しておきたい。

多くの闘争とその主体が〝外部〟の〝支援〟勢力に対して閉ざされた態度をとり、〝支援〟をあくまで〝助人〟の位置におくのに対して、三里塚は闘う意志のあるすべての人々を仲間・主体として受け入れるという、きわだった〝開放〟性を示してきた。三里塚ではお互いの闘いの足を引張らないという自覚的な内的規律を公準として、これに参加する誰もが自分にもっともふさわしい創造的な形態でのまたあらゆる水準の闘争を組織することが可能である。

そして、三里塚は、日本人民が〝どのようにして闘うことができるのか〟〝どのようにすれば勝てるのか〟を実際に学びとることのできる〈闘争の武器庫〉であり、〈階級闘争の学校〉なのである。

何故なら、三里塚には日本人民の長い闘争が創造してきたもっともすぐれた闘争の形態と経験が豊かに継承され、実践され、集積されてきているからである。その主なものだけを列挙してみても、集会・デモに始まり、座りこみ・大衆団交・公団への突入闘争、クソ爆弾・竹槍・鎌・耕うん機デモ・バリケード戦・砦戦・地下壕戦・機動隊に対するセン滅戦、敵の施設の破壊戦、鉄塔建設、選挙闘争、部落及対同盟と横断的な各行動隊、団結小屋や人民テント村、同盟休校、公団用地の「不法耕作」・援農・有機農法と「産直」運動、労農講座……。そして空港占拠と連帯ストが新たに加わるであろう。まさに〈人民の武器庫〉である。

また、三里塚の戦闘は、最大の武装力を集中した「強大な」国家権力・「巨大な」空港に対する「弱小な」人民の闘いが〝地の利・天の時・人の和〟を駆使した創造的な力によって、一見強大で巨大な力を誇る敵の弱点を次々とひきずり出し、これに徹底した攻撃をくわえることによって勝利する可能性をつかむという見事な〝弁証法〟を開示しているからである。

日本人民は、今、このもっともすぐれた〈思想の宝庫〉であり、〈闘争の武器庫〉〈階級闘争の学校〉である三里塚をその全身で共有できるたぐいまれな好機――三里塚決戦をわがものとしなければならない。

【「統一」再刊準備版九六号（一九七七年九月二十五日）・九七号（同十月二十日）掲載】

資料

三里塚3・26管制塔占拠闘争の十周年を迎えて

全国的政治勢力、解放の綱領（新しい解放社会像）、根拠地の形成こそ、国家と対決する人民闘争の鍵である

宮部彰

「三・二六」から十年。支配階級が「革命だ！」と驚愕。闘う人民が「奇跡だ！」と表現した「管制塔占拠闘争」の勝利から十年。この十年は三里塚闘争にとって、そしてまた日本の人民闘争にとっても、相つぐ試練と苦闘の十年であった。

三里塚闘争が現空港の既成事実化の重みや、成田用水攻撃、八三年「分裂」という厳しい試練と困難を強いられたように日本の人民闘争総体も「国際化」という予想を超えた新しい時代状況の到来の中で、格闘を強いられた。

今、我々、そして闘う人民が「三・二六」＝三里塚決戦に登りつめる過程で何を目指しこの十年の格闘をふりかえり、そして、今、何に向って新たな挑戦を開始しようとしているのかを改めて把え返すことは、けっして無意味なことではないであろう。

いや、歴史を忘却し対象化できぬ者に、闘いの未来と展望を語る資格はないと言うべきなのだ。数百名の逮捕者、東山薫、新山幸男、そして原勲の死という幾多の犠牲をも出しながら戦い取られた「三・二六」の地平とは何か。そしてこの今我々は何へ向って挑戦を開始しているのか。

三里塚決戦＝「3・26」闘争が開示したもの

決戦としての「3・26」

「三・二六」へ登りつめる過程＝三里塚決戦は、言葉の真の意味での「決戦」であった。

それは個別・三里塚闘争の「開港か廃港か」をめぐる決戦でもなく、ましてや、「万年決戦」を唱える決戦主義でもなかった。三里塚決戦が一時代を画す「決戦」であったことを、我々はまず、再確認しておかなければならない。

我々は、「決戦」を次のように規定してきた。

「決戦」とは、階級的政治的力関係の全体的な転換を規定する闘争となり、一時代にわたる人民の闘争力と闘争経験の全蓄積を投入し検証する場となり人民の闘争力の普遍的・全体的結合を形成し単一の人民主体を具体的に登場させる飛躍点となる闘争である」（「統一」七七年九月一五日号・十月一〇日号、「日本人民にとっての三里塚決戦の歴史的意味」）。

すなわち、三里塚決戦を総括する基本的意味とは、第一に、その時代の支配的価値観（社会編成の原理）の総体と人民的価値観（人民諸闘争の全蓄積）の総体が、いかなる内実・内容において政治的に激突したのか。そして、第二に、その決戦において人民の側はどのような主体形成の路線をとり、いかなる主体陣型で闘い抜いたのか、ということに他ならない。

攻防の内実としての近代主義批判

その時代の支配的編成原理（価値観）を、我々は一言でいって「近代主義」と規定し批判を展開した。従来の資本主義批判の限界性と狭さを、現存社会主義の挫折を踏まえつつ、より広くかつ根源的な批判の視座を確立することによって乗り超えようと試みたのである。三里塚決戦は、近代主義的諸原理を撃つ最前線根拠地として位置づけられた。現代社会を撃つ思想的ラディカルさこそ、多大の犠牲を払って国家権力と激突した実力闘争の持久的展開を可能にした。

「近代主義の社会編成の原理と、それを撃つ視座は、基本的に次の三点に集約される。

第一は、近代的生産力の批判、すなわち工業文明・工業優先社会、生産力主義に対する批判である。具体的には工業優先→農業・農村破壊の社会のあり様と、生産力主義の帰結としての自然破壊に対する批判であった。そこでは資本主義の資本―賃労働の支配―被支配関係を基軸とする生産関係の視点からだけでなく、従来は中立的と見なされた近代的生産力体系そのもののあり様（抑圧性・疎外性・破壊性）が真正面から問題とされたのである。

対抗する価値観―人民的編成原理として「人民が本当に必要とするもの＝使用価値の視点」から生産を問い直すことを基軸として、自然との共生、農業を基礎とする社会、効率主義に対する人間的リズムを優先する生産、中央管理システムに対する地域的自給的生産の志向などが対置された。

第二に、国家主義批判としての近代主義批判である。

従来の国家観は、〝道具としての国家〟（経済的支配階級の道具としての国家）観であり、国家権力を行使する主体の階級的性格だけが問題とされる傾向が強く、国家の近代主義の原理（中央集権的システム）そのものに対する批判は不十分であった。

プロレタリアートが国家を掌握すれば、国家は人民解放の道具となるとする楽観主義は、現存する社会主義国の抑圧的・否定的現実に答えることができなかった。

また、ブルジョア国家も「公共性国家」＝福祉国家の形態の確立によって、民衆の諸利害を中立性＝公共性の名の下に中央主導で調節する万能の主体として立ち現われていた。

国家が道具であり、中立的であり、公共性の体現者であるという近代主義的了解の前提そのものが問われ、国家否定の視座が再確立されなければならなかったのだ。

対抗理念として、国家の中央集権管理システムに対抗する「地域住民の自治」「人民の自己決定権」の原理が対置された。国家の中立性・公共性・万能性に対して、人民が受動的被保護者から脱却し、自立し連帯し自己決定する人民として登場することの決定的重要性が主張されたのである。

第三には、近代合理主義・近代的知に対する批判としての近代主義批判である。

それは、前の批判と密接に関係し、工業文明・生産力主義を支える科学主義＝科学物神崇拝と、国家主義を支える官僚的・専門的な知と技術の独占に対する批判であった。科学性と専門性による「知」の支配の対極は、民衆の「無知」が再生産される構造総体を撃ち、人民的「知」の復権、人民に固有の「知」のあり方が目指されたのである。

官僚主義的農政の空論に対して、農民自身の自然との関わりの中で歴史的につちかわれてきた技術・能力が再評価された。

そしてまた、科学性・専門性に対する批判は、政治的真理を独占するとされてきた党の科学的・専門的「知」に対する把え返しをも不可避としたのである。党と人民の関係性が改めて問われたのである。

人民主体形成における根拠地の提起

支配的編成原理に対する批判の視座が「近代主義批判」であるならば、主体形成路線の核心は「根拠地」概念の提起と練りあげである。

根拠地概念の提起に至る回路＝問題意識は三つあった。

ひとつは、六〇年代後半の全人民的政治反乱がぶち当った壁、政治闘争の抽象性をどのような形で乗り超えるのかという問題意識である。政治的・普遍的であろうとすれば、諸闘争の寄せ集め、総和の上に自民党政府打倒や日帝打倒という抽象的政治性を付与するだけに終り、具体的・内在的批判の総体としての普遍性を獲得できないという壁にぶつかっていた。

我々は、このジレンマを具体的な闘争の中に開示される政治的普遍性の発見、すなわち根拠地の創造として解決しようとしたのである。そこでは、敵の抽象的批判によって諸闘争の固有性を捨象し政治的普遍性に還元するのではなく、人民の創造的営み・闘争の中に普遍性が発見されなければならなかった。

三里塚闘争の中に育くまれた生活・生産・闘争の一体化と人民的編成原理の萌芽に、我々は、人民的普遍性のあり様を見い出したのだ。それは「三里塚にすべてがある」という主張で表現され、のちの「対抗社会論」を内包したものであった。

第二に、根拠地は党と人民の共同の営みによって、政治的普遍的真理を創造する場として位置づけられた。

マルクス・レーニン主義の党が真理の独占者であるという前衛党主義への批判は、内ゲバ批判・セクト主義批判という消極的批判にとどまることなく、根拠地論として積極的な対象化・実践の場を与えられたのである。

三里塚農民と党派との関係として現われた戦闘的な人民と党との相互主体的な関係こそ、強大な装備と人員を擁した国家権力を圧倒した〝人民の戦（いくさ）〟が勝利した源泉であった。実力闘争の堅持と持続にとって、根拠地の形成が必須の条件であることが明らかになった。

第三の回路は、根拠地はいかにして全人民的政治結集、〝ひとつの人民〟を形成していくうえでの環たりうるのかという問題である。

それを解くテーゼは、根拠地は、外、すなわち闘うすべての人民にむかって開かれたものでなければならないということだ。閉ざされた闘いは、異質なものとの関わりを通して普遍性への発展の契機を失うばかりか、その具体的な姿を持った普遍性を通して全人民が自己のあり様を変革し転生するテコ、鏡の役割りを果すことを不可能にする。徹底的な開放性、それが根拠地が全人民的政治結集と主体形成の媒介者たりえる決定的な要なのである。

新しい時代の到来と我々の格闘

「国際化」の一撃と三里塚決戦の位置

七八年、「三・二六管制塔占拠闘争」の年はガイドライン安保の年であり、日本国家が戦後性を決算し、「国際化」の一歩を踏み出した年であった。

八一年にレーガン、八二年末に中曽根が登場し、新保守主義が掲げられた。ケインズ主義的福祉国家は、小さな政府と競争原理（新自由主義）の社会に転換し始め、福祉が切り捨てられ、行革の下での大量の労働者の解雇が吹き荒れ世界的な軍事化が進行した。

パックス・アメリカーナの崩壊が公然と叫ばれ、国際協調体制への移行の中で、日本国家の歴史的再編が開始されたのだ。だが、重要な点は世界的な高度経済成長を支えた戦後的諸条件が喪失したにもかかわらず、それに変わり発展を保証する蓄積体制と政治体制が形成される展望を、いまだ全く見い出せていないことだ。ケインズ主義・フォード主義の破産にもかかわらず、新保守主義の政治思想やマネタリズムの経済学も危機回避の一時的

処方箋にすぎず、新たに全面的にとって変わるものとはなりえないであろう。

すなわち支配的な編成原理が危機に落ち入り、ひとつのまとまった一元的理念を喪失してしまっているのである。近代主義の諸理念は危機に頻している。工業文明のたそがれ、中央集権的官僚機構の無能力の露呈、永続的成長・発展神話の崩壊、科学万能論の瓦解（チェルノブイリ）、結果としての平等の保証という欺瞞的イデオロギーの空中分解、公共性国家からイデオロギッシュな国家への転換の始まり。

これに対応して、闘う人民の側も近代主義批判という一元的視座だけでは、支配の総体と対決できなくなっている。安保の再編・強化、失業の増大、行革攻撃に対して、近代主義批判は、それだけでは有効な武器たりえなかったと言わなければならない。

以上のことを踏まえるならば、三里塚決戦は資本主義批判が近代主義批判として普遍性を持ちえた、時代的特殊性の中での決戦であったと言えよう。支配の原理・理念も一元的なまとまりを持ち、人民の側も近代主義批判として支配総体と対決しえたのだ。

しかし、今や近代主義の諸矛盾が複合的に噴出する時代なのだ。

三里塚決戦は、戦後的枠組の中での、成長と発展のバラ色の未来を調歌できた時代の最後の決戦であったのだ。福田政権が成長の未来を夢見てケインズ主義的財政政策によって膨大な財政赤字を生み出したように、人民の側も近代主義批判の人民闘争の多発、全国的展開を前提にして戦略を立てたのだ。

しかし、公共投資は抑制され、根拠地三里塚は連帯すべき闘争が生れる客観的条件の喪失の中で孤立・奮闘を余儀なくされた。

三里塚決戦は、今から見れば、特殊な条件下での赤と緑の自然発生的な合流が可能であった時代の中での決戦であった。特殊な条件（近代主義＝資本主義）は、国際化の一撃で、その土台から揺り動かされはじめたのである。

近代主義の後退の諸相

近代主義的諸理念は、完全に清算されたわけではないが後退と変質を開始している。

第一に、工業文明は終焉を宣告され、脱工業化・情報化・サーヴィス化が叫ばれるに至っている。従来の工業のイメージであった重厚長大産業は軽薄短小産業へと転換されつつある。巨大開発としての工業文明から、ME化・コンピュータ化社会への転換である。自然破壊や農村破壊は依然として進行中であるが、それは近代化・開発政策による破壊というよりも、「国際化」の下での切り捨てによる崩壊のイメージに近い。

逆に、情報化・サーヴィス化社会は都市の「再活性化」を促進し、人間が生活し居住する場としての都市を解体しつつある。教育の荒廃や家族の崩壊はより進行し、共同性の全面的崩壊の中で膨大な民衆が浮遊化しつつある。労働雇用の柔軟化・弾力化はそれに拍車をかけている。浮遊化した民衆の不満や不安は、一方では宗教やオカルトブームを生み、他方ではサラ金をしてまでのレジャー・サーヴィスの消費へと向かわせている。

第二に、近代的知＝合理主義・科学主義から、反近代主義・非合理主義への逆転が生れつつある。

物的富の量を価値あるものとするGNP信仰はすでに色あせたものとなった。逆に停滞した社会への願望が首をもたげ、中世ブームやエスニックブームが広がっている。合理性・科学性への信仰は、いまやオカルト・宗教ブームに変わりつつある。

合理性と科学性がコンピューターへと一元的に対象化され、人間主体はその逆に非合理主義に走るという事態が進行しているのだ。

闘う主体の側にも、マルクス主義を近代合理主義の産物として清算するマルクス葬送派が台頭し、身体性・感性の復権が叫ばれ、エコロジー的発想が着実に広まっている。

第三に近代主義的国家像が変化しつつある。近代国民国家は通常においては、イデオロギーや宗教性を排除し、中立性をまとい、民衆の諸利害を合理的に調整し解決する「公共性国家」として存立してきた。しかし、今や、イデオロギー性が表面化し国家は奉仕の対象へと逆転してきている。民衆の諸利害よりも国家そのものの存立のための利害が優先されている。

天皇制イデオロギー攻撃はその表われである。近代主義の観点からは時代錯誤として無視されてきた天皇制の突出は、国家の近代主義的了解の枠組自身を大きく揺さぶっている。

このように、近代主義的諸理念は大きく後退しつつある。その行きつく先が、ポスト・モダンか超近代か、それとも近代と前近代の矛盾的複合的時代の到来かについては議論の分かれるところだろう。

ただし、はっきりしていることは、近代主義の埋念が国家・政治・文化・社会・生産をトータルに総括しえた時代は、もはや終りを告げたということだ。

根拠地形成と政治闘争の復権とのギャップ

三里塚決戦の過程で我々が握みとった根拠地革命の路線は、八〇年代に入って大きな壁にぶつかった。

三里塚闘争が「開港」の既成事実をめぐる攻防において八一年のジェット燃料阻止闘争を最後に、対峙状況（負けないが勝ちきれない）に直面した時、我々は、三里塚の質をもって全国の地域に根拠地を形成し、その全国的連合によって再度の戦略的総反攻を準備し立て直す路線をとった。

しかし、この路線は、「国際化」に基づく日本国家の再編攻撃と政治的に対決する陣型をつくりえなかった。根拠地形成の道が国家の攻撃が特定の拠点つぶしの攻撃からより全面的なものに変質する中で、国家の全体との対決にせりあがる契機を欠かざるをえなかったからだ。根拠地形成は、「国家総体との対決」

に自覚的に進み出る側面を欠落させることによって、「国家からの自立」の側面に多くよりかかる「対抗社会」の形成運動へと全体としては流れていったのである。

また、近代化・開発路線の後退は、近代主義に対決する戦場を地方・農村という場から、都市における生活の見直しという場に移行させた。そこでは国家との対決よりも、資本の文化的再包摂との攻防が、きわどいつぼぜり合いとして展開された。

「国際化」という新しい時代の到来の中で、根拠地の全国的連合による戦略的総反攻の準備という路線は、ひとまずカッコにくくられなければならなかった。「国際化」を撃つ「政治闘争の復権」が、緊要の課題として自覚された。それは、根拠地路線との一定の切断の上に構想されなければならなかった。「政治闘争の復権」の試みは、根拠地路線とは区別され切断されたもうひとつの切り口から主体形成の展望に挑戦しなければならなかったのだ。「国家からの自立」ではなく「国家との対決」を主要な切り口とする主体形成への再挑戦である。

しかし、八十年代中期を通じて追求された「政治闘争の復権」の様々な試みは、その挫折によって、多くの課題と教訓を我々に明らかにした。「国家と対決する政治闘争」は、無残なまでに、その政治理念の貧困さと、主体形成路線のおそまつさを露呈したのである。

「政治闘争の復権」の挫折の根拠は三つあったと言える。

ひとつは、新しい政治理念をついに創り出せず、大衆的政治性のために「平和と民主主義」の理念によりかかるか、それとも、「反帝国際主義・第三世界連帯」の抽象的政治理念を固守することに終ってしまったことだ。膨大な軍事的・政治的知識は蓄積されたが、それを支える政治思想の新たな展開は、いまだ一歩を踏み出したにすぎない。それゆえ主体形成の路線と闘争スタイルも、危機をアジる啓蒙主義的宣伝と中央動員的闘争形態を様々な試みにもかかわらず結局のところ乗り超えられなかったと言えるだろう。

二つ目の要因は、国家と対決する政治闘争の切り口から、根拠地を形成・発見することに成功しえなかったことにあるだろう。安保の再編・強化は、制度的再編が当初は主要であったために、地域的な具体的な場から根拠地を形成する視点しか持ちえなかった我々にとっては、根拠地形成は課題となしえなかったのだ。政治闘争に固有の根拠地形成の方法論が求められていると言えよう。

しかしながら、三つ目には根拠地形成の芽が全くなかったわけでもないのに、それへ向けた自覚的努力が不十分であった点があげられる。

国鉄解体に抗する国労の闘いは、企業内組合主義ゆえに根拠地形成に必要な異質な要素との結合を欠き閉鎖性を克服できずにきた。また初発の段階でイデオロギー的に対決できず後退につぐ後退のために、初発の勝利と持久戦下の根拠地形成の展望がつかめなかったといえる。

三宅島住民の闘いにして初発での勝利的展開と住民自治の理念を持ちつつも、いまだ根拠地としては十分に〝開かれた闘い〟とはなっていないと言える。

政治闘争と根拠地形成のギャップは、八〇年代闘争がかかえた基本的な困難性である。今、この困難性をいかに克服し乗り超えるのかが、我々の緊要の課題としてせり上っている。

政治勢力形成の新しい挑戦を大胆に開始しよう

人民綱領・根拠地・政治連合の形成を！

我々に今、求められているのは、新しい根拠地の形成であり、解放の綱領（民衆の自治と連帯にもとづく新しい社会像）の獲得であり、そして政治勢力形成の環としての政治連合の形成を本格的に推し進めることである。

第一の、新しい根拠地は二つの方向・領域から同時に追求されなければならない。ひとつは「国家と対決する」闘争をあらゆる領域戦線で多発させ、その切り口から根拠地形成を目指すことである。もうひとつは、「国家から自立する」諸運動を多数に展開しつつ国家と政治的に対決する道を見い出すことによって創造されてゆくべきであろう。

それは、いくつかの根拠地の形成として展望されるだろう。（三里塚はその中で重要な位置を占める）。ひとつの根拠地が支配総体と全面的に対決する時代的条件はもはやありえないからだ。

また、根拠地はある一定の特殊な条件下ではじめて形成できるものであるから、その好機を見い出す我々のとぎすまされた視点と政治的判断能力が問われるといえよう。チェルノブイリを契機に反原発運動が国家の原発政策と対決する政治性を獲得しつつある例は、好機を的確に把握する能力の必要性を示している。

さらに根拠地は、国家と実力で対決する主体的力量、つねに発動可能な実力を持たなくてはならない。その意味においても三里塚闘争は根拠地の最前線であり、三里塚の地平を共有・継承・発展させることが求められている。

第二の人民綱領の獲得の必要性は、次のように言える。

つまり、支配の編成原理が近代主義という一元的なあり方を後退させ、新しい矛盾を激発させている時、支配の混沌とした総体を撃ち批判できる人民の側からのトータリティが求められているからである。支配の総体をトータルに批判する人民綱領の獲得の独自の闘いは、諸闘争・諸運動が相互に横に絡がり部分性を克服する努力と重なり合いながら、それを一層促進するテコとなり、政治勢力として登場するための、どうしても必要な作業であるのだ。

第三に、政治連合の形成は根拠地形成と人民綱領獲得を政治レベルにおいて凝縮させ結

びつけ人民主体形成の過程を一挙的に飛躍・促進させるための環であり主導力である。

同時に、政治勢力の形成は既存の諸闘争・諸運動の結合・凝縮にとどまらず、今だ潜在的でしかありえていない浮遊する民衆の不安・不満を、選挙やナショナルセンターの形成という形で政治的に登場することを通してへ顕在化させ活性化させるテコの役割を果すためにも、どうしても必要とされている。

「国際化」にともなう大転換の中で、民衆の不安・不満は強まっている。大型間接税―増税、農産物自由化による農民切り捨て、円高不況と多国籍化による失業増大、原発推進政策の強行による生命の危機感の増大、地価高騰による居住権の一揮、天皇制攻撃の激化にともなう管理・相互監視体制の強化などに対する民衆の不安と不満は確実に増大している。食料の自給を支持する人々が七割を超え、八六％の人が原発に不安を感じているという世論調査の結果は、そのことの象徴的表われに他ならない。

新しい政治勢力の登場は、いまだ政治的に登場しえていないこれらの人々に積極的かつ大胆に開かれたものとして構想されなければならない。既存の諸闘争・諸運動の枠組を大胆に乗り超え、いまだ見えぬ民衆の政治的欲求と反乱の可能性に直接訴えることが求められているのだ。

まさに、政治勢力・政治連合の形成は、政治的レベルの根拠地の形成に他ならない。異質なものが真理を独占するのではなく相互発見と相互啓発の中で、共同の政治的真理を発見・創造し、同時に圧倒的多数の民衆に政治的に開かれることによって、主体形成の政治的根拠地の役割を果たすのである。

新しい根拠地の形成、人民綱領の獲得、政治勢力・政治連合の形成という三つの課題と作業を、有機的に結合させ戦略的自覚的に推し進めることが、我々が全力を挙げて取り組むべき最も重要な任務なのである。

「3・26」の地平を継承・発展させよう

政治勢力の形成の必要性が増々明確になりつつあるこの時期においても、待機主義・改良主義的傾向が根強く残っている。

情勢的に判断して政治勢力形成の時は、いまだに熟していないという立場や、政治的対決よりも部分的・限定的改革こそ今は必要だといった改良主義は、攻勢的なパトスと情熱を組織するユートピア（根本的変革の理念）を欠落させ待機主義に陥っている。

政治勢力の形成は幻想であり実現できる状況にないのであろうか。断じて否である。

「三・二六」の勝利は、あらゆる待機主義と悲観主義を乗り越え、「奇跡」を実現したのだ。圧倒的多数の人々が「開港」は阻止できないことを自明の前提とし、アリバイ的な闘いに逃げ道を見い出そうとしていた中で、攻勢的闘いとラディカルな理念の力を全面的に開花させることによって、「三・二六」の勝利は実現されたのだ。

「三・二六」の地平を現在において継承することとは、まさに攻勢的な闘いのパトスと、人民の希望を組織する新たな理念・価値観の創造を全力を挙げて闘い取ることだ。

そして、「三・二六」を乗り越える道とは、政治勢力形成の闘いを戦略的・自覚的に追求することを通して、「三・二六」の勝利が内包していた自然発生的あり様を乗り越えることである。

「赤と緑の合流」の先駆的形態としての「三・二六」を本当の意味で越えることとは「赤と緑の合流」を、政治的で自覚的なあり様で再現することに他ならないのである。

新しい挑戦―政治勢力の形成を全力で推し進めよう！

【「統一」再刊準備版三〇四号（一九八八年三月二五日）掲載】

『希望社会への新しい座標』ブックレット①

いま農業・農村・地域は

大野和興著

◇農業恐慌の時代

◇グローバリゼーションとアジア小農世界

定価　七〇〇円

○郵送代　一冊の場合　八〇円

A5版　五六頁　発行　工人社

グローカル座標塾・白川真澄講演DVD

第2期第1回～同第4回　各一枚　一五〇〇円

第2期第1回　グローバリゼーションは暴力だ！

第2期第2回　不安とあきらめの格差社会―その正体

第2期第3回　公共性って、何だ？

第2期第4回　左翼はなぜ、ここまで衰弱してきたのか？

1978・3・26 NARITA

管制塔を占拠し、開港を阻止したオヤジたちの証言

三十周年記念出版編纂委員会　一三〇〇円＋税　結書房

三里塚を再び緑の大地に

空港反対闘争に賭けた上坂喜美の後半生

上坂喜美遺稿追想集編集委員会

一八〇〇円＋税　アットワークス

格差社会を撃つ！

ネオ・リベにさよならを　白川真澄

一九〇〇円＋税　インパクト出版会

どこが問題！郵政民営化

白川真澄

五〇〇円　市民の声・江東編／樹花舎

女たちの共同体（コレクティブ）

七〇年代ウーマンリブを再読する

西村光子

一七〇〇円＋税　社会評論社

※これらの本は工人社でも扱っています

『希望社会への新しい座標』ブックレット1

格差社会から公正と連帯へ

―市民のための社会理論 入門―

白川真澄著

あなたはどう考える？

◆自分で決めるって、どういうこと？

◆競争にすべて委ねて大丈夫？

◆人権ってなんだ？

◆助け合って暮らすって、どういうこと？

◆暴力はなくせる？

A5版　一二〇頁

定価　一二〇〇円＋税

○郵送代　一冊の場合　八〇円

発行　工人社

http://www.winterpalace.net/zahyoujuku/

政治理論誌　**蒼生**

第9号　市民的公共性プロジェクト　千五百円

第8号　共労党第十六回大会報告　八百円

第7号　エコロジーと資本主義　九百円

グローカル重要論文集

vol・1～vol・5　各五百円

WTO徹底批判と私たちの課題　佐久間智子

グローバリゼーションの中での帝国と国家　白川真澄　四百円

郵政民営化に反対する　白川真澄　四百円

二一世紀學問ノススメ　五百円

世界を読み解き考えるためのブックガイド

グローバリズムとナショナリズムに抗し市民的公共性の21世紀を！（上・下）　各百円

市民派選挙必勝マニュアル　宮部彰　虹と緑発行　千円

●出版物購読申込先（TEL・FAX・メール等でお申し込み下さい）

工人社　東京都千代田区富士見一―三―一上田ビル二一〇

TEL 03-3264-4195　FAX 03-3239-4409

http://www2sbigobe.ne.jp/~mmr/gocal e-mail im43wj@bmabigobe.ne.jp

郵便振替　00160―7―48406　工人社

白川真澄［著］

格差社会を撃つ

ネオ・リベにさよならを

フリーター、日雇い派遣など不安定労働者の急増は、新自由主義にもとづく小泉構造改革に端を発している。生活困窮者を生み出しては切り捨てる凄まじいまでの「格差社会」はどのように意図的につくられたか。民営化や地方格差など、多角的に負のスパイラルを検証する。

PPブックス⑦
ピープルズ・プラン研究所監修
2008年1月15日刊行
定価 1900円＋税

［発売］インパクト出版会
113-0033 東京都文京区本郷 2-5-11 tel 03-3818-7576 fax 03-3818-8676
Eメール impact@jca.apc.org http://www.jca.apc.org/~impact/

（目次）

第1章◎格差社会を撃つ
「自己責任」論を打ち破り「連帯」の思想を蘇らせよう
公正と連帯の思想と運動を ——格差論争のなかで
【補論】広がる格差・増える低所得者
——「二〇〇五年所得再分配調査報告書」から見えてくること
格差社会に立ち向かう
——平等化と「われらの世界」構築の戦略
格差があっても悪くない？
——小泉「構造改革」の五年と安倍政権

第2章◎新自由主義改革 民営化と「小さな政府」のからくり
ネオ・リベ「改革」を止めろ
——小泉流「官から民へ」「小さな政府」を批判する
経済危機の中の小泉「構造改革」
小泉「構造改革」の現在 ——対抗線をどこに引くべきか
民営化に対抗する原則をどう立てるか
誰のための・何のための郵政民営化か
大きな自己負担を強いる「小さな政府」
新自由主義の「労働市場改革」

第3章◎破壊される住民自治
小泉「改革」は地方分権と住民自治に敵対する
地方自治・地方分権への大逆流
「地方分権」の罠 ——地方自治と「国民保護」

77～78年三里塚決戦の記憶と意味

定 価 800円
発行日 2009年3月26日
発行者 工人社
東京都千代田区富士見 1-3-1 上田ビル 210
Tel 03－3264－4195 fax 03－3239－4409
http://www2s.biglobe.ne.jp/~mmr/glocal/

国連・憲法問題研究会発行物

30集 「人間の盾」が見たイラク戦争 松崎三千蔵 四〇〇円
31集 イラク戦争とアメリカの論理 島川雅史 四〇〇円
32集 「拉致」異論 北朝鮮問題にどう向き合うか 太田昌国 四〇〇円
34集 「国民保護」という大ウソ 有事法制の狙いは内的他者との戦争 石埼学・重松朋宏 四〇〇円
35集 戦争の民営化とは何か イラク戦争で暗躍する戦争請負企業 奥村皓一 四〇〇円
36集 米軍再編下の自衛隊大転換 前田哲男 四〇〇円
37集 増殖する「ナショナリズム」の正体 なぜハマるのか 北田暁大 七〇〇円
38集 「安全・安心」脅かす共謀罪 小倉利丸 四〇〇円
39集 スッキリわかる「米軍再編」 半田滋 四〇〇円
40集 アジア外交 本当に問われるのは何か 日中台一〇〇年史の視座から 丸川哲史 四〇〇円
41集 防衛「省」と「集団的自衛権」 究極の解釈改憲が狙うもの 山内敏弘 四〇〇円
42集 米軍再編と対テロ戦争 小林アツシ・池田五律 五〇〇円
43集 現場から見た「紛争屋」の平和論 派兵恒久法と憲法九条のはざまで考える 伊勢崎賢治 四〇〇円
44集 世界食糧危機の犯人は誰だ G8サミットと食糧問題 佐久間智子 四〇〇円
27集 「対テロ戦争」の仮面をはがす 多木浩二 四〇〇円
26集 護憲論の弱点をどうこえるか 笹沼弘志 四〇〇円
24集 「奉仕活動義務化」を問う 楠原彰 四〇〇円
22集 改憲状況と自衛隊 古関彰一／水島朝穂 五〇〇円
21集 日本「新ナショナリズム」の現段階 高橋哲哉、竹見智恵子 四〇〇円
20集 「人道的介入」は〝正しい戦争〟なのか 試練に立つ平和主義 樋口陽一 五〇〇円
18集 「周辺事態法」で再び〈殴る側の国〉に 渡辺治／山田朗 五〇〇円
14集 日本における歴史修正主義の台頭に対して 金子マーティン／鵜飼哲 五〇〇円
12集 朝鮮戦争に〈参戦〉させられて 三宮克己 三〇〇円
9集 つくられる「有事」試される「人権」 水島朝穂／奥津茂樹／新倉裕史 千円

◎ 購入申し込み
送り先 郵便振替［00160－7－48406 工人社］
＊通信欄に報告集等の購読希望が何集か明記を
東京都千代田区富士見一－三－一上田ビル二一〇工人社気付
TEL 03－3264－4195 fax 03－3239－4409
http://www.winterpalace.net/kkmk/ E-mail:kkmk@winterpalace.net

グローカル号外　1974年5月28日第3種郵便物認可

800円